

Title	ラーजेन्द्रラ・プラサード自伝
Author(s)	
Citation	印度民俗研究. 1973, 1, p. 57-91
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/50319
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

ラーजेन्द्रラ・プラサード自伝[※]

序

そもそもラーजेन्द्रラ・パーブー¹の自伝に序文がないからとてなにか不都合なことがあるだろうか。それに私ごとき学問や文学を全く縁なきものとしてきた輩に序文が書けようはずもない。ところが、1918年のケーラー・サティヤーグラハ²の際に初めてお目にかかって以来、小生の心をとらえてはなさずにいるパーブーの魅力、それに互いの心を結びつけている友愛の絆のためにここに序文書きを余儀なくされているような次第である。

ラーजेन्द्रラ・パーブーに接する人はみなパーブーの淳朴かつ謙虚な人柄に感化を受けずにはいられないが、その香気はまた、この自伝の隅々まで漂っている。

読者諸氏はこの四半世紀ほどの間にわがインドが如何なる道を辿つて来たかという生々しい歴史、そして崇高な憂国の士の胸中に映じた歴史像をこの自伝に見出されよう。

本書にはラーजेन्द्रラ・パーブーの幼少時のビハールの風習、陋習
~~~~~

※ 本書は、本文に言及されているように1940年に執筆が開始され、中断があつて、42年に獄中で書き継がれ、再度中断されて46年に完成されたものである。訳出にあたっては、次の第三版を用いた。

Rājendra Prasād, Ātmakathā (Sastā Sāhitya Maṇḍal, New Delhi, 1962)

本書はこれまでにインドの主要な地方語に翻訳されているほか、一部抄訳であるが、英語版も出ている。

Rajendra Prasād — Autobiography (English Version, 1957, Asia Publishing House, Bombay)

なお、本邦では、この英語版の「ダイジェスト版」ともいふべきものが刊行されているので付記しておく。

吉沢清次郎著『ラジェन्द्रラ・プラサード—インド共和国初代大統領』(新樹社、昭和33年)

の弊、当時の農村生活、願行、祭礼、当時の子供たちの日常、あるいは、教育状態のありのままが手にとるよう見られる。また、プラサード氏の質朴な人柄や家柄の良さを偲ばせることどもと並んで、愉快なこと、あるいは、悲痛なことなどが描き出されている。さらには、今日のヒンドゥー・ムスリム両教徒の間を隔てている深い溝はなく、あるのはかけりなき友愛の情景のみである。それは見る人の心に新鮮なものを与えるものでありながら、不幸なことに今ではもう消え去ろうとしている。

1905年のベンガル分割<sup>3</sup>の頃よりバーブーの愛国心は一段と燃え立つのであるが、その後もこの道一筋に一步一步を踏みしめて前進して来られた。そして1917年のチャンパーラン・サティヤーグラハ<sup>4</sup>の際にバーブーはガンディー・ジーに身命を托されたのであった。それ以後のバーブーの自伝はそのまわがインドそのものの過去30年間の歴史をも物語ることになる。読者諸氏は本書に人生を向上せしめる力の源泉を見出されることだろう。それだけに愛国の士一人一人に是非読んでいただきたいものである。

#### バッラバーイー・パテール識す

(註)

1 (Bābū) 社会的地位や学識のある男子に対する敬称。一般にクシャトリアヤヴァイシユヤ・カーストに属する人に用いられる。このほか、目上の人、父親、事務員の意にも用いられる。

2 (Kherā Satyāgraha) 1918年3月グジャラート州(当時はボンベイ州)ケーラー県(アーメダーバード南方)で凶作のため農民たちが免税を願い出たのに当局が応じなかった。そこでガンディーは納税拒否の非暴力的闘争(サティヤーグラハ)を指導した。完全勝利ではなかったが、一応の成功を収めた。

3 (Banga - bhanga) 1905年7月、時のインド総督カーゾンは今日のビハール州及びオリッサ州をも含んだ巨大なベンガル州を東西に二分し東部ベンガルとアッサムとを併せた一州と西部ベンガルとビハール、オリッサとを併せた一州とを設ける計画を発表した。この計画はインド支配強化策の一環として実施される性格のものであり、ベンガルの歴史的・文化的・経済的背景を無視し、分割統治策を強引に進めようとするものであったがために、ベンガル人の間に激しい反対運動が起こり、ついには全インドの民族主義運動にも大きな反響を呼ぶことになった。これは1911年のジョージ五世の訪印デーリー接見式典一を機に廃止が発表された。

4 (Champaran Satyagraha) これについては本自伝の21～23章に詳しい記述がある。ビハール州チャンパーラン県における藍の強制栽培をめぐって白人農園主の不法行為に苦しんできた農民たちのためガンディーは、1917年にサティヤーグラハ闘争を指導し、勝利を取めた。この際、R. プラサードはガンディーに出会い門弟となる。

## 再刊に寄せて

本書の初版が出たのは1947年1月のことである。それまでのことは本文と付記の中に収められており、この再版にはそれ以後のことが収められる予定であった。再版までの間にはわが国にとって重要な事件が種々起こったが、それには私自身も密接に関係している。たとえば、制憲議会とその活動、インドの独立達成と主権の移譲、食糧農業相就任、ガンディー・ジー<sup>1</sup>の逝去、ガンディー記念財団の設立、国民会議派の組織化、制憲議会の命による臨時大統領就任、1952年の新憲法による総選挙後の大統領拝命、大統領としての活動と国内各地の遊説、等々。これらについては、いずれも書こうと思えばかなり書く材料はある。だが今は、それを果たすだけの時間の余裕もないし、その立場にもないというのが真相である。したがって、この再版には新しい材料は全く追加されていない。

この時期については、世界史の観点からも特に重要なものであった、と説明すれば十分であろう。第二次大戦の惨劇から解放された世界の国々はこのこの間に復興に歩を進めたのであった。いや、そればかりでなく、戦争の破壊を目撃したすべての国は恒久平和の到来せぬ限り人類の進歩も真の幸福も蜃気楼以外の何物でもないことを認識するに至った。したがって、この時期を自己分析及び自己実現の時期と呼ぶことができよう。この時期が特に重要なのもう一つの理由がある。すなわち、独立後間もなくでありながら、インドは世界平和に幾分なりとも貢献することができたということである。それと同時に主権がインド人の代表者たちの手に移ってからはインドには新世紀がひらけてきており、その建設にわれわれは全力を挙げてきている次第である。したがって、この10年間というものはわが国の歴史にとって幾久しく記憶されよう。機械とか機構といったものは、一旦動き出せばしばらくは自力で動き続けるものである。しかし、停止しているものを始動させるのは容易なことではない。この時期のインドの指導者たちはちょうどそうした任務に就かねばならなかったのである。

1947年から今日までの間に筆者の周辺になにが起こり、毎日がどのように過ぎ去っていったかについて叙べるのは、たとえ不適當ではないにせよ不必要なことには相違ないように思われる。筆者にとってはこれは甚だ私的なことであると同時に公的なものでもあるので、これについて説明する資格があるとは思えない。けだし、民族の歴史の中で国家に命じられた役目をどこまで責任をもって果たすことができたかについての判断を下すのは、国民である。

文芸界、並びに一般の方々は初版を歓迎し、惜しみなく讃辞を下された。ここに感謝の意を表したいと思う。この度、このように再版が新しい体裁のもとに諸兄姉にまみえることのできるのはそのおかげである。

サスター、サーヒトヤ・マレダル社の経験が生かされて本書も装いを新たにし、再版のおかげで改訂されることになった。有難いことである。

ニューデリー

1956年11月26日

ラーजेन्द्रラ・プラサード

(註)

1 (ji) ヒンディー語で敬意や崇敬の念を表すために人名や地名に付加される語。男女の区別なく一番普通に用いられる。

## 1 先祖

連合州<sup>1</sup>にアモラーという所があるが、同地にはカーヤスト<sup>2</sup>がかなり住んでいるということである。ずいぶん昔のことになるが、そのカーヤストのある一族が同地を出て東へ進み、バリヤー<sup>3</sup>に居を定めた。バリヤーに住みついてかなり経ってからのことであるが、その一族から分れた人たちが同地を出て北方へ進み、今日の(ビハール州)サーラン県<sup>4</sup>のジーラーデーイー村<sup>5</sup>に落着いた。また、別の分家の人たちはガヤー<sup>6</sup>に移り住んだ。ジーラーデーイー村に移り住んだ人たちのうち幾家族かは、そこからさらに少し離れた村に移った。このジーラーデーイー村に住むようになった一家が私の先祖というわけである。この村に移住したのはおそらく私の七、八代前のことである。先祖は貧しく、仕事を求めてやって来たのであった。移り住んだその村にはだれも読み書きのできる者はいなかったし、先祖はその頃も読み書きの出来たカーヤストなので、村人たちはそこに居住するのを許してくれたのだった。その頃から私の先祖はハトゥアー<sup>7</sup>に仕えるようになり、事務関係のこまごました職にありついた者がいたようである。ハトゥアー・ラージは当時さほど大きくはなく、その財政も今日ほどのことはなかった。領主の一族がここを中心に住むようになったのも後のことで、当時はどこか別のところに住んでいた。

先祖は数世代にわたってハトゥアー・ラージに仕えていた。どのような地位にあったのかは不明であるが、伝聞の限りでは高いものではなかった。村での住居も屋根は草葺きだった。先祖はジーラーデーイー村では大ザミーンダールであったあるカーヤストの小作人であった。私たちの先祖は、よその数ヶ村のザミーンダールになったことはあるが、今日に至るまで自分たちの村のザミーンダールに名を連ねたことは一度もない。

祖父はミシュリーラールといい、二人兄弟の弟で、大伯父<sup>8</sup>はチョウドウルラールといた。ミシュリーラールは天逝したので、子供は男児を一人遺しただけだった。その遺児がマハーデーヴ・サハーイ、すなわち、私の父である。チョウドウルラールにも息子は一人しかできず、ジャグデーヴ・サハーイといた。ミシュリーラールが全く思いもかけず天逝したので、大伯父は私の父をとてても可愛がり、息子同様に養育した。ジャグデーヴ・サハーイは私の父より年長であったが、息子はなく、一人娘に死なれてしまった。マハーデーヴ・サハーイには息子二人と娘三人が生まれたが、娘の一人は幼くしてこの世を

夫つた。ふとの二人は嫁いだが、姉のバガヴァティーデーヴィーは早く夫に死なれたのでそれ以来、今日に至るまで実家に住んでいる。もう一人の娘は私たち兄弟の姉であつたが、子供はひとりも儲けずに亡くなつた。兄の名はマヘンドラ・ブラサードである。私は末子というわけだ。<sup>9</sup>

ハトゥアー・ラージで大伯父のチョウドゥルラールは名を挙げ、ディーワーン（執事）<sup>10</sup>にまでなり、30年近くもの間その地位にあつた。その頃、チャトラダリー・サーヒー・マハーラージ（侯）が領主だつたが、マハーラージは子息を世継ぎとはせず、孫のラージェンドラ・ブラターブ・サーヒーを遺言状により後継者と決めた。チョウドゥルラールを篤く信任していたマハーラージは、今はのきわに「孫を頼む」と言い遺した。マハーラージの没後、幼少のラージェンドラ・ブラターブ・サーヒーには次から次へと危難がふりかかつて来た。家族は裁判に訴えたために、争いは枢密院<sup>11</sup>にまで持ち込まれたが、その裁定はハトゥアー・ラージの分割を認めず、分割不可分のラージの後継者決定権は先代にあるとして、ラージェンドラ・ブラターブ・サーヒーが後継人となつた。この裁判沙汰の最中はラージェンドラ・ブラターブ・サーヒーの生命も危険に曝されていたので、その警護にあたるのは容易なことではなかつた。チョウドゥルラールは自ら警護のために幼君の床のすぐ傍に寝たり、食事の際は毒味をしていたという。

チョウドゥルラールはマハーラージの身命を守護したばかりでなく、ラージの経営面にも繁栄をもたらした。土地を開墾させるなどして収入もほぼ3倍にした。マハーラージもこのようなわけでチョウドゥルラールには大いに敬意を払い、チョウドゥルラールの前では決して煙草を喫わず、チョウドゥルラールが来ると聞けば、水煙管を片付けさせることにしていたという。

当時は廷臣の俸禄は通例、とても少なかつた。おそらくディーワーンであつた頃ですら、大伯父が月々受けていた<sup>デーブ</sup>禄は50ルピーから100ルピーどまりだつた。もつとも、その俸禄には、<sup>フッカー</sup>宿舎に住む家族や使用人全員のためにシーダー<sup>12</sup>、すなわち、米・豆類・バターなどが侯庫から毎月現物支給される。という余禄がついていた。ラージのうちの幾つかの村の徴税もマハーラージはチョウドゥルラールに請負わせていた。その中にはマハーラージの自耕地<sup>ジラート</sup>もあつて、稲作を行なつていたので、それからの収入もかなりのものとなつた。

チョウドゥルラールはなかなかの敏腕家だつた。ラージの収入が二倍三倍に増してもなお、民衆から愛され、信頼されていた。そのことは私自身が体験し確認したところでもある。非協力運動の頃、私とその近辺に遊説に行くと行く先々で老人たちがチョウドゥルラールの孫であるという理由で特に歓待してくれたものだつた。チョウドゥルラールは一家の隆盛にも努めた。年収7、8千ルピーのザミンダリー（地主の土地所有権）を買取つたが、それは特に米を売った金で手に入れたものだつた。幾つかの村は祖母と大伯母の二人の名義になつていた。というのは、米を作らせたり売ったり、ザミンダリー購入の資金を調達したりするのはこの二人の仕事だつたからである。

先にも述べたように、チョウドゥルラールは息子のジャグデーヴ・サハ

ーイと甥のマハーデーヴ・サハーイに勉強をさせた。まだ英語のはやらぬ頃だったので二人ともペルシア語だけを習った。<sup>13</sup> おそらく、一度はチャプラー<sup>14</sup>に出して英語を学ばせようとしたことがあつたらしく、またジャグデーヴおじは英語の本の1, 2冊は習つてもいたのであるが、マハーラージがこれを奨励しなかつたので、ペルシア語だけで満足せねばならなかつた。ペルシア語はマハーラージの令息、すなわち、後のクリシュナプラターブ・サーヒー・マハーラージ<sup>15</sup>を教えた家庭教師<sup>16</sup>について習つた。

マハーラージ・ラージェンドラプラターブ・サーヒーの歿後、管理は一時後見人局の手に移つた。チョウドルラールは英語を知らなかつたのでディーワーンの職務を続けることができず、それにそれまで30年間ほども勤めてきた地位から左遷されるのを快しとしなかつたので、それを機に私たち一家とハトゥアー・ラージとの数世代にわたる関係も絶えてしまつた。これは私が生まれる前のことである。

ハトゥアーを引き払つてチョウドルラールはジラーデーイー村に戻つた。しばらくして、短期間ではあつたが、ゴラクプル県<sup>17</sup>のタマクヒー・ラージ<sup>18</sup>のディーワーンを勤めた。しかし、その時にはかなりの老齢になつており、土地の気候にもなじめなかつたこともあり、間もなくその職を辞してジラーデーイーに戻り晩年を過ごした。私はまだとても幼なかつたが、タマクヒーのことをほんのわずかながら記憶している。

## 註

1 (Samyukt Prānt) 英語ではThe United Provinces of Agra and Oudh, 略称U. P. 1835年にベンガル管区より The North-Western Provinces が誕生, 1877年にアワド地方 (Oudh) が編入される。1902年以降, アーグラ・アワド連合州と呼ばれる。準知事 (Lieutenant Governor) の管轄。インド独立後, 1950年1月 Uttar Pradesh (北部州) となる。54県から成り, 面積294,413Km<sup>2</sup>, 人口88,364,779 (1971年)。

2 (Kāyasth) 北部州, ビハール州, ベンガル州などに多い, 別名, 書記カースト。彼ら自身の伝承ではクシャトリヤ種姓に属し, 今日ではいわゆる再生族に数えられるが, その起源は職業上のもので, 異種姓の混成と考えられている。ムガル朝時代にも書記・会計係などの職業につくことが多く, それがひいてはペルシア語やウルドゥー語の習得に向かわせることになつたものと思われる。今日においても教育程度が高く, 知的活動に従事する者が多い。

カーヤストに関する諺の若干を示す。

Kāyatha ka choṭa Gowāra ka moṭa

「カーヤストの息子は (読み書きが達者になるよう) やせ (がよく), 牛飼いの息子は (うんと働けるよう) がつしり (がよい)。」 (ビハール, ムザッファル県)

Kāyatha na rahatī to ajāta ho gayala rahatī

「カーヤストにあらざれば, カーストの内にはいないはず。(社会的な地位

があるためカーストに関する生活上の規定に忠実でなくても大目に見られる)」  
(ビハール, チャンパーラン県)

以上, B. N. Mishra, V. Mishra (ed.), *Kahāvāt Kosh*, Patna 1965参照.

*Kāyasth kā beṭā paṛhā bhalā yā marā bhalā*

「筆の使えぬカーヤストの息子は死んだがまし。」

*Kāyasth kā hathiār qalam hai*

「カーヤストの武器は筆」

以上, W. Fallon, *A Dictionary of Hindustani proverbs, Sayings, emblems, aphorisms* (K. N. Gupta (ed.), *Hindustani Kahavat Kosh*, New Delhi, 1968) 参照.

第二例に見られるように, 一部は飲食面やその他の生活面で厳格なインドゥーから非難を受ける向きもある. その起源については Rajbali Pan-deya, *Hindi Sahitya kā bṛihat Itihās*, vol 1. (P. 107~8) 参照.

カーヤストに関するインド社会の含蓄に富む評言を補足的に示しておく. いずれも, Herbert Risley, *The People of India* (2nd ed., Delhi, 1969, P. 309) より引用.

In a Kayasth's house even the cat learns two letters and a half.

Drinking comes to a Kayasth with his mother's milk.

3 (Baliyā) ガンジス川及びガーグラール川にはさまれた Uttar Pradesh 最東端の県名及び県庁所在地名. ガーグラール (ghāghrā) 川の対岸はビハール州のサーラン県. バリヤー県の人口は 1,585,899 (1971).

4 (Sāran) ビハール州西北部に位置し. ガーグラール川とガンダキー (Gandakī) 川とはさまれる. 面積 6,952km<sup>2</sup>, 人口 4,283,439 (1971). この地方に話される言葉はバリヤー県で話されるものと同じく, ボージプリー (Bhojpurī) 語.

5 (Jīrādeī) ビハール州サーラン県中西部にあるシーワーン (Sīwān) 市近く (Sīwān から北東部鉄道で北部州 Gorakhpur へ向かって 11 km). Chaprā 市から約 70 km.

6 (Gaya) ビハール州バトナー県の南部に接するガヤー県. その中心ガヤー市は州都バトナーから約 90 km. ジーラーデーイー村から約 200 km のところにある.

7 (Hathuā Rāj) 1953年, ビハール州土地改革法により廃された大ザミーンダールの領地. ラージは英語では Estate と呼ばれた. サーラン県の北中部に位置.

8 大伯父を特定する語はなく, ここでは「祖父の兄」という表現になっている. 以下では, 普通, 祖父の意に用いられるダーダー (Dādā) とかバーバー (Bābā) といった語が大伯父に対して用いられている. ちなみに, 「いとこ」を指す「父方, あるいは, 母方の兄弟姉妹」という表現は普通, 用いられず, 兄弟姉妹 (これも男子と女子の区別しかない) を表わす Bhaī や Bahin



といったことばが用いられる。特別にそのような関係を表わす必要が生じた場合には、父方や母方を表わすことばと共に用いられる。

9 西暦1884年(明治14年)12月3日生まれ、1963年(昭和38年)2月28日歿。

10 (Dīwān) 英語綴りDewan。これには、蔵相、藩王国の宰相などの意味があるが、ここでは、Estateであることを考え執事と訳した。

11 枢密院(Privy Council) 1833年の法律により枢密院の司法委員会が、植民地臣民による上告を審問するイギリス皇帝の権能を行使してきた。民事及び刑事の双方について上告が認められていたが、上告資格については、インドの高等裁判所の権限との関連等で一定の制限が加えられていた。

12 (Sīdhā) 普通、料理されていない穀類を指す。バラモンなどへの謝礼や喜捨の際もこの方法によることが多い。

13 ペルシア語だけ カーヤストの教育としてはそれで十分なものと考えられていたのであろう。なお、本項の註2を参照。

14 (Chaprā) サーラン県南西部にある都市。県庁所在地。1961年インド国勢調査によれば人口75,580人。製糖工場多し。Chapra Collegeなどの教育機関あり。

15 Krishna Pratāp Sāhī The Indian Year Book 1920(Bombay)の人名録にHatwa Maharaja Bahadur Guru Mahadev Asram Prasād Sahi(1893-)の記述があり、1896年10月に父Maharaja Bahadur Sir Kishen Pratap Sahi, K. C. I. E. (Knight Commander of the Indian Empire)の後を継いだことになっている。KishenはKrishnaの英語綴りであることから両者は同一人と考えられる。

16 Maulavī とは本来、イスラム教の法学者や法官を指したが、学者の意にも用いられるようになった。さらには、ペルシア語やウルドゥー語の家庭教師をするイスラム教徒の意にも用いられた。

17 Gorakhpur 北部州の東北部に位置する県名。県庁所在地も同名。この県は東部・東南部がビハール州のチャンパーン県及びサーラン県と接する。

18(Tamakuhī-Rāj) ゴーラクプル県の最東部、チャンパーン県及びサーラン県とに接する所にあつたEstate。

## 2 兄と姉

先に触れた通り、私たち5人兄弟姉妹の中ではバガヴァティー・デーヴィーという姉が一番年長だった。この姉は私が生まれる前にすでにカーヤストのある資産家に嫁いでいた。子供時分といっても4、5歳頃のことだが、私は姉の嫁ぎ先へ遊びに行った時に、その家の豪華な生活を見た。その義兄は6人兄弟であったが、その一人一人に付人と護衛が一人ずつついていた。邸内には馬や象が幾頭も繋がれており、広大な建物が幾棟かあった。ところがどうした理由かは知らぬが、4、5年の間に見る見るうちに年収7万5千ルピーほども

あつたという地所もすっかり人手に渡ってしまった。義兄はその頃、ジューラーデーイー村の私たちの家で亡くなった。私は幼くはあつたが、それでもその時の騒ぎと大伯父やおじ、父、それに家族の女たちのいかにも悲嘆にくれた様子を今でも憶えている。これが物心ついてから最初に目にした人の死の情景であつた。

次の姉はそのことがあつてから嫁に行つた。兄も嫁をもらった。私はこの姉と兄の結婚式を見た。兄の式の時には行列<sup>パレード</sup><sup>1</sup>について行つたが、当時4歳ほどだつた私は母恋しさに泣出してしまった。それまではたとえ1日や2日といえども母のそばを離れて他所へ行つたことはなかつたのであろう。兄は私より8歳年長だったので、私にとっては都合のよいことが多かつた。兄が受けた教育を当然私も受けることになり、後からついて行きさえすればよいので、特に困難にでくわすこともなかつた。

大伯父が存命だつたころのことがはつきり記憶に残っている。私と私より5、6ヶ月後に生まれた又従妹と二人して大伯父にまつわりついて遊んだものだつた。大伯父も私たち二人をととても可愛がり、遊び相手になつてくれた。ジャグデーヴおじはザミーンダールの仕事をしており、よくチャプラーとの間を往き来していた。いつもなにごとか土地関係の裁判沙汰があつたのである。兄はチャプラーに出て英語を習つていたので、兄に会いに行くのもおじだつた。おじがチャプラーから戻ってくるのがわかると、いつも子供たちは家から少し離れたところまで出迎えに行つたものだつた。もつとも、出迎えというのは、菓子や果物などをねだり、なにでもよいからおじにもらうとそれを持つておじよりも先に家に走つて帰り、母にそれを見せることだつた。

父は家から離れることがなかつた。土地のことにはあまりかかわりがなく、園芸が趣味で、よく長時間庭園で精を出していた。今も父が手がけた二つの大きなマンゴー園が一家の財産として残つており、なかなかよい実がなる。父はベルシア語の造詣が深く、サンスクリット語も少しは学んでいた。インド医術<sup>2</sup>、イスラム医術<sup>3</sup>に関心を持つていたので、その方面の書物も蒐集したり研究したりしていた。こんなわけで正規の教育を受けていたわけではないが、そちらの方の医術では立派な腕前になつていた。いろいろな病人が訪ねてきていた。薬の買える人たちには処方箋を書いてやり、貧しい人たちには自家製の薬を与えていた。薬を調合するのに男が一人雇われていた。父は脈をとるでも往診に出かけるでもなく、容態を尋ねるだけで薬を与え、多くの人を治してやつていた。そういうわけで父はずいぶん名が売れていた。また、父は頭健で、子供の頃から道場で体操もしていた。学校の休暇で家に帰つた私に父がムグダル棒<sup>4</sup>の扱い方を教えてくれたり、それを使つていろいろな技を見せてくれたりしたことも記憶に残っている。乗馬も巧みで、立派な馬を一頭飼つていた。子供の頃、乗馬を兄と私に教えてくれたのも父であつた。まだ学生だつた頃、休暇で村に戻ることがあると、兄と一緒にそれぞれ馬に乗つて散歩に出かけたものだつた。

子供の頃は田舎の遊びもよくやつた。とりわけカバッディー<sup>5</sup>とチッカ

一<sup>6</sup>とはよくやったものだ。一日として欠かしたことはなかったろう。大学を出るまでは続き、休暇で村に帰ると必ずやったものだった。兄も一緒になって遊んだ。田舎ではもう一つ別の遊びがあった。ドールハーパーティー<sup>7</sup>というもので、その遊びの時には木登りをする。私は木登りがこわくてその遊びには一度も加わったことはなかった。また、村には川もなかったので泳ぎは習わずじまいになった。

母と祖母は私をととても可愛がってくれた。私は小さい頃から早寝早起きの癖がついていた。家は煉瓦造りであったが、中庭を囲んで廊下と部屋がある古風な造りで、部屋ごとに扉がついており、天井近くに小さな天窓が一つ二つこしらえてあった。とりわけ冬には夜が長いせいもあって、まだ暗いうちに目が覚める。すると私は母を眠らせてはおかず、床の中で母を起こす。母は目を覚ますと朝のお祈りの歌を聞かせてくれる。時には『ラーマーヤナ』<sup>8</sup>などの物語もしてくれる。そのお祈りの歌や物語などに私は感銘を受けた。こうして小さな天窓を通して戸外が明るくなったのがわかるまで横になったまま母にお祈りの歌や物語を聞かせてもらい、すっかり明るくなってから戸外に出る。夕方あまり早く寝るので、夕飯ははつきり目をあけて食べたことはほとんどなかった。その時分は夕飯も大変おそくなるのが普通だった。子供はおろか、老人たちも一眠りしてから食事をとるようなことであって、真夜中の12時、1時より前に食膳につくことはなかった。男たちの食事が済むと続いて女たち。最後に使用人たちという順序で、夏のうちなど使用人たちが夕飯を済ませるのは夜明け近くになるほどだった。こういうわけなので、夕飯を食べずに寝たからとて自分がいけなかったのではない、と思っている。

家にはカーヤストの料理人<sup>9</sup>が一人いたので、おばや母は勝手仕事を受け持つてはいなかった。とはいっても、野菜の煮付けぐらひはしなければならなかった。日暮れ時になるかならぬに私は母をつかまえて一緒に寝てくれと泣きつくので、母は仕事の手を休めて添寝をしなければならなかった。でも、それは私がすぐ寝ついてしまうので、手間のかかることではなかった。母はまた起上って仕事にかかるのであった。いつも夜中に起こされて食事をさせられたのを憶えている。目が開かぬのだが、母が私の体を揺り動かしては九官鳥や鸚鵡の名前を呼んだりお伽話をしたりして口を開けさせては食物をおしこむというわけである。私たちが「カキ小母さん」と呼んでいた乳母がいたが、このようにして食べさせるのがとても上手だった。他の人がどんなに工夫してみても目も口も閉じたままなのだが、この乳母はあの手この手で口を開かせては御飯をつめこんでくれた。夕方早く床につき未明に目を覚ます習慣は長いこと続いた。チャプラーヤバトナーの学校に行くようになってからも同じことだった。5年級になるまで夕食を自分の手で食べたことはおそらくなかったろう。バラモンの料理人<sup>10</sup>がいたので夜には抱きかかえられ例のように目を閉じたまま開いた口に握飯をつめこんでもらった。私はそれを噛まずに呑み下すのだった。

弁護士をしていた頃も私は夕方早く床につく習慣が抜けずにいた。夕方依頼人の書類を手にとって見るまではよいのだが、そのうち七時半から八時頃

になると舟を漕ぎだすので仕事はやめにすることになっていた。1914年から15年にかけて法学修士の試験勉強をしていた頃の出来事である。当時私はカルカッタ高等裁判所で仕事をしていたのだが、法科大学で教鞭もとっていた。昼間は裁判所に出かけるので試験勉強の暇は夜しかなかった。それで夕方、本を手にして読み始めるのだが、睡気もそれと同時に見舞ってくるのであった。ある日のこと、こういう具合では試験勉強もうまく行かぬ、なんとかして夕方の睡気を追払ってせめて9時までは勉強しなければならぬ、と考えた。そこで、睡くなってくると本を手を持って立上ったのだが、それでも睡気がとれぬので部屋の中を歩きながら本を読んだ。どのくらいの間そうしていたのかわからぬが、不意に本が手からすべり落ち、私もそれと同時に床の上にとんと音をたてて仰向けに倒れた。頭が割れなかったのが不思議なほどだった。少し怪我をしたのは事実だ。それからはその実験は危険だと悟ってやめてしまい、なんとか昼間に暇を見つけてはそれで我慢することにした。

### 餅

1 (Barāt) インドでは結婚式は通例、花嫁の家で挙げられる。その際、新郎は盛装し馬や象に乗り、親族・縁者・友人たちと行列をつくり花嫁の家へ向かう。その行列をバラートという。ただし、男子のみ参加。

2 原文にはAyurvedaとある。インドの伝統医療。今日も西洋医療と並び盛んである。中央政府の奨励によりGujarat Ayurvedic University (Jamnagar, Gujarat)などの機関が研究や医師の教育・養成にあたっている。

3 原文ではTib (Ar. Tibb = 医療) とあるが、古代ギリシア医療を継承して、ムスリムにより発達させられた医療。インド医療の影響も受けているが、西暦11世紀以降数百年にわたり独自の発達をとげ、その業績の一部はヨーロッパにも伝えられた。対症療法のみならず、予防医学・保健医学・薬草研究などの面の特徴がある、とされる。インドでは、ギリシア医療 (Yūnānī) とかḤakīmīと呼ばれており、今日もAligarh Muslim University (Tibbia College) などでの研究教育が行われており、民間での治療行為も続けられている。

4 バット状の棒で、重量を調節できるように芯の部分に細工がしてある。これを一本ずつ両手に持ち交互に背中の中のほうにまわして腕や上半身の筋肉をきたえる。

5 Kabaddī 「カバディー」と叫びながら敵陣に入り一息が切れないうちに敵方に触れて戻る。無事に戻れば触れられた者が死に、敵方に捕えられ息が切れれば当人が死ぬ。女子も競技することがある。全インド的な遊戯。

6 Cikka 集団遊戯。一方が陣地を築き、他方がその防衛線を突破すると勝つ。ビハール地方の遊戯。

7 Dolhapatī 本文にあるように木登りをする遊戯だが、未詳。なおRāhul Sāṅkṛityāyan, Merī Jīvan Yātrā (1), (Calcutta, 1944, P.17)にあるOrhapatīと同じか。

8 Rāmāyāna サンスクリット語の大叙事詩。近代インド諸語にも多数

の翻訳や翻案がなされている。ここで言及されているものは恐らく北部インド  
ー帯の民衆に愛読されているトゥルシーダース (Tulsīdās -1523-1624?)  
による翻案『ラーム・チャリト・マーナス』のことであろう。

9 ヒンドゥーの家庭では飲食面での浄・不浄の観念から料理人はバラモン  
か同カースト、ないし、それ以上のカーストの者を傭うのが普通。

10 これは下宿先や学寮に自費で料理人を傭っていたもの。裕福な家庭の子  
弟にとってはこうした下宿生活は普通のものであった。

### 3 就 学

文字を習い始めたのは5、6歳の頃である。兄はすでにチャプラーに出  
て同地の学校に通っていた。私は当時の習わしでモウルヴィー（家庭教師）に  
ついて文字を習い始めた。先生は就学式<sup>1</sup>の日に私の家に移って来られた。ピ  
スミッターを唱えて式を済ませた。祝い<sup>シールニ<sup>2</sup></sup>が配られ、先生には祝儀が出  
た。習い初めたのは私を含めて三人で、他の二人も親戚の者だった。一人は私  
より2歳年長のヤムナー・ブラサードで、他の一人は今もこの世にないが  
やはり私より歳上だった。ヤムナー兄が兄貴分で、遊びにしても子供っほいい  
たずらにしてもいつも指揮官を務めた。ヤムナー兄の叔父さんでとてもひょう  
きんな人がいた。この人は私にとっても親戚筋の人だった。父より若くもあつ  
たが、父に感化されて父のいろいろな長所を身につけていた。乗馬もなかなか  
巧みだったし、薬を調合しては人にわけてやっていた。それに射撃や石弓<sup>3</sup>の  
腕前も立派なものだった。ペルシア語も学んでいたし、チェスもよくさしてい  
た。しかしこのおじもこうしたことでは父に一目置いていた。それはともかく  
非常に陽気で愉快な人だった。

私たちを教えることになったこの先生は風変りな人で何事にも通じてい  
る。というのが口癖だった。そこで、このバルデーヴおじにとって、先生はか  
らかうのに格好の人物となった。おじはいろんなことを先生に話しかけては、  
それがどういうことであつても知っているとかやれるとか先生に言わせるよう  
に仕向ける。そのようなわけで先生はチェスも差せるとおっしゃるのだが、お  
じと差してみても一度として先生が勝利を取めたことはなかった。私たち子供  
僕このからかいを不安と好奇心に駆られて見ていたが、可笑しくても笑うわけ  
にはいかなかった。このことは大伯父のチョウドゥルラールの耳にも入ったの  
で、大伯父もそのからかいに一枚加わることになった。

ある日のこと、バルデーヴおじが先生に果樹園に猿が入って来ているの  
でなんとかして追い払わなければならぬ、ひとつ石弓で追い払ってみてはどう  
だろうか、と言った。すると先生は早速石弓撃ちはわしが上手だ、とおっしゃ  
った。おじは先生が石弓が全然使えないのを知っていたが、からかってみる気  
になった。おじは先生を果樹園へ連れて行った。石弓と弾とを先生に手渡し、  
これをうんと引張って猿を撃つて下さい、と言った。先生はうんと弓を引い  
て弾を撃ち、猿にどんな傷を負わせたろうかを見ようとしたところが、なんと

御自分の左手の親指からぼたぼたと血が滴り落ちて来た。指の痛みに先生はしゃがみこんでしまわれた。弾は猿に当るところか先生の親指に当たったのだった。

また別の日のことだが、夕方みなと一緒に散歩に出かけた。大伯父も先生もバルデーヴおじも一緒だった。話がいろいろはずんでいたが、牡牛が一頭現われた。みなが牡牛は人を襲うと言ったのだが、おじがけしかけたものだから先生が牡牛を恐れるはずがない。牡牛は恐れもせずに進み出た先生を突き倒した。このようなからかいはしばしばのことだった。

ある日のことバルデーヴおじは射撃について一席ぶった。ところが先生は、何事にせよ自分が通じていないことがあると認めるのは体面にかかわると思っておられるので、自分にも射撃ができる、ときっぱり言ってしまった。おじは先生と連れ立って銃を持って出かけた。先生には男の子が二人あり、その子供たちも私たちと一緒に勉強していた。私たちと一緒に先生の子供もついて行った。少し行くと高い木にはげたかが一羽とまっていた。おじは先生にはげたかを狙うように言った。先生にもたせてあった銃は旧式の先込銃なので弾薬は銃口に装填する。それに重量も相当なものである。先生はそれまで一度も銃を扱ったことはなかったのだろう。銃を胸にほとんど垂直に立てたようにして狙いを定めた。引金の音がしたとたん、はげたかではなく、先生が地面にばったりあおむけに倒れられてしまわれた。バルデーヴおじはすぐさま先生を抱き起こすと子供たちに水を持ってくるように命じた。先生はようやくのことで家にかつぎこまれたのだった。

こういう遊びごとを間にはさんで私たちはベルシア語を習っていたが、7、8ヶ月後にこの先生は辞めていかれた。文字をおぼえて『カーリーマー』<sup>4</sup>を読みかけていた頃かと思う。次に新しい先生マウルヴィーに来ていただいたが、この先生はとても威厳のある人で、教え方も上手だった。この先生には2年間に亘って習ったが、『カーリーマー』『マームキーマー』<sup>5</sup>『カーリクバーリー』<sup>6</sup>『クシュハール・シプヤーン』<sup>7</sup>『ダストゥールルシプヤーン』<sup>7</sup>『グリスターン』<sup>8</sup>『ブースターン』<sup>9</sup>までも教わった。その頃、私たちはカイトイー文字<sup>1c</sup>を覚え、算術を習ったのだが、何時、どのようにして習ったのか記憶がない。1週間のうち5日半はベルシア語を習った。木曜日の午後と金曜日の午前中はベルシア語がなくて、カイトイー文字と算術を習っていた。そのほかにも遊びの時間もかなりあった。

日課は次のようなものだった。朝早く起きてマクタブ（学校）へ行く。学校というのは私の煉瓦造りの家の離れの軒先である。その離れには部屋が一つあり、そこに先生と家族が住んでおられ、私たちはその軒先で大きな椅子に腰掛けて勉強した。先生は教える時は木製の寝台や椅子に腰をかけておられた。朝早くその教室へ行ってまず前日習ったところを復習する。復習を早く済ませれば、それだけ早く次の学課を習うことになる。私はしばしば他の二人よりも先に行って復習も早く済ませ、次の課も先に習う。そうこうしているうちに夜が明け太陽も少し昇る。すると召使いが呼びに来て洗顔させ、母親のところへ

食事に連れて行く。この時間が半時間から45分間あり、休み時間となる。朝食を済ませて戻ると暗誦しなければならぬ。それも暗誦してしまうと先生から『本を閉じる』との命が下る。本を閉じると今度は石板をとり出さなければならぬ。この間にも少々遊び時間がもらえる。時によつてはまた家に戻つて間食することもあつた。字は石板に書く。いっぱい書いてしまうと消す。そうする間にも笑つたり遊んだり走りまわつたりする機会もあつた。昼には水浴びをしたり食事をするので1時間から1時間半の休憩があつた。先生は寝台に寝そべるが、私たちはしばしば眠くないことがあるので横になつたまま石板を盤にしてチェスをさす。駒は先生が目をさます前に片付けてしまう。チェスもその頃覚えたのだと思うが、何時、どのようにして、だれから習つたのか不明である。午後には次の課を教わる。それも少し暗誦して先生に聞いていただくと日のくれる1時間半ほど前に遊びの時間をもらう。その時間にはまり遊びやチックカーをする。夕方、燈火がともるとまた、本を開いて勉強することになつていた。日中習つたのを両方とも暗誦して先生に聞いてもらう。それが済むと先生は本を閉じるように命じる。すると本を閉じて規律通り先生にお辞儀をして家に帰る。

夕方になるとすぐに私は睡気に襲われる。それでいつも、うつらうつらしているのを見つげられて先生に打たれはせぬかと心配だつた。遊びの兄貴分はジャムナー兄だつたが、勉強が早く終わるように工夫するのもやはりジャムナー兄だつた。夕方の勉強のために燭台に油をさすことになつていた。ジャムナー兄は母中に布ぎれに灰や砂などを包んだ小さな袋をこしらえて手もとにしのばせておく。燭台に油が多く入っているように思うと、芯を上げるような素振りをしてその袋を燭台の中に入れる。すると見る見るうちに油を吸い取つてしまうので燈火は間もなく消えかかる。先生は女中がどうしてこんなにわずかしか油をささなかつたのかと言つて立腹されるが仕方がないので勉強を早く切り上げることになる。また、時にはジャムナー兄は小用を口実に教室を抜け出る。ところが小便もせずには走つて私の母親のところへ行つたり自分の母親のところへ行つたり、あるいは、ガンガー兄の母親のところへ行つたりして、もうだれそれが居眠りしかかつたので早く女中に呼びにやらせてくれぬと先生にたたかれると言う。ジャムナー兄が小用から戻るとほどなくして女中が来て先生にもうおしまいにしてやつて下さいと言うので先生も課業を終わりにするというようなことだつた。

ある日のこと、例のようにジャムナー兄が駈けて行くのを同じ村の人で私たちの遠縁のおじにあたる人が見つけ、先生にジャムナーがどこかへ駈けて行つた旨を告げた。ジャムナー兄はお取調べを受けることになつたが、小用に行つたところ暗くてこわくなり駈け出したのだ、ということで命拾いをした。

ジーラーデーイーの村で得たベルシア語の知識はすべてこの先生に負うものである。私たち三人もこの先生が好きになつていた。家を離れてチャプラーに英語を習いに行かねばならなくなつた時には先生も私たちもともどもつらいおもいをしたことだつた。

(註)

1 原文には Akṣarārambh とある。これはヒンドゥーの通過儀礼の一であり、就学式 (Vidyārambh Samskāra) とも呼ばれる。5歳から7歳にかけて行われるのが普通。ただし、今日これは学校教育の一環として位置づけられるようになってきている。ヒンドゥーの儀礼として行なわれた場合、護摩をたき、ヒンドゥー教の神々に祈りを捧げ、師を拝み、文字の書初めをし、バラモンに布施を贈り、祝福を得る。ところが、カーヤスト・カーストの著者の場合、師はムスリムであり、「ビスミッラー (神の御名により)」と原文にあるところからも 'Bismillāh Khānī' (ビスミッラー・ハーニー) と呼ばれる、ムスリムの習い初めの式をしたものと考えられる。この式では師は、'Iqura' bi-'smi rabbi - ka alladhī khalaqa' (創造主の御名により読み) (コーラン第96章第1節参照) とアラビア語で復習させたり、コーランの第一章句を復唱させたりする。先生にはターバン、金子、衣服などが贈られる。これは5歳4ヶ月4日目に行なわれることになっていた。ともかく、これはカーヤストにあつては、カーストとしての職業訓練の開始といった意味で重要なものであつたようだ。なお、Rajbali Pandeya, Hindu Samskar, Varanasi, 1966 (2nd ed.) PP. 137-142 を参照のこと。

2 (Shīrnī) 本来、ペルシア語で (正しくは, Shīrīnī), (甘味)菓子 の意。ウルドゥー語やヒンディー語では神、聖者、師にお供えする菓子の意にもなる。ただし、ここでは先生ばかりでなく、親戚縁者などにも内祝いとして贈られたものと考えられる。

3 石弓, バチンコ Gulel, Gulail という。普通、木の叉を用いてつくる。亜鉛製のものもある。弾は土くれ、小石、ないし、土と棉花とを煮固めたもの。

4 'Karīmā' 別名 'Pand - Namah'. ペルシアの詩人サアディー ((Musharrib - ud - Dīn Sa'adī)) (1184?-1291) の教訓詩でインドではペルシア語初学者用の教科書。

5 原文には 'Mamkīmā' とあるが、正確には 'Mā Muqīmā'. サアディーの著作とされる。

6 (Khālikbārī) インドのペルシア語・ヒンディー語の詩人・学者、アミール・フスロー (Amīr Khusrō 1253-1325) のペルシア語・ヒンディー語辞典。

7 原文には Khushhāl sīmiyā 及び Dastūrulsīmiyā とあるが、正しくは Khushhāl ṣibyān (ṣubyān), Dastūrul ṣibyān (ṣubyān) で、'Dars-i-Nizāmī' (ニザーミー・コース) と呼ばれた伝統的なペルシア語教程の教科書名。

8 "Gulistān" 前述のサアディーの代表的作品の一 (1258年)。

9 'Būstān' これもサアディーの代表的作品の一 (1257年)。

10 (Kaithī) カーヤスト文字の意。ナーガリー文字から派生した文字で、カーヤストが主に用いてきたためにこの名がある。ビハール地方を中心に



用いられるが、さらに3種類の書体にわけられる。

#### 4 村 の 生 活

当時の田舎の生活はと言えば、今日よりはるかに質素なものだった。ジーラーデーイ村とジャマーブル村とはそれぞれ独自の村落を成しているのであるが非常に近接しているので両村の境界線は判然としない。したがって人口に関しては、両村のものを合計しても差支えなからう。この両村を合わせてみるとほとんどすべてのカーストの人々が住んでいる。人口は2千人を越えるだろう。当時、田舎で手に入るほどの品は大抵この村でも手に入った。今日では新しい商品を扱う店ができて、パーン<sup>1</sup>やビーリー<sup>2</sup>も売っている。その頃はそのような品はまだ村では手に入らなかった。もつとも、葉煙草や噛み煙草は売っていた。衣料品店は立派なのがあったので、他の村からも客があった。中にはよそから仕入れに来る商人もいた。米・豆類・小麦粉・調味料・塩・油、等はみな村で手に入ったし、ちっぽけなものながら、薬店もあり、ハッレーとかバヘーラーあるいはビーバル<sup>3</sup>などを売っていた。私の記憶では、一軒もなかったのは菓子屋だけのようだった。村にはコーヤリー・カースト<sup>4</sup>の者たちもかなりいたので、野菜類は十分間に合っていた。村のアヒール<sup>5</sup>たちは少数だったが、近くの村々はかなりいたので牛乳やダヒー（凝乳）に不自由することはなかった。糸紡ぎをする人もかなり多かった。村にはジュラーハー<sup>6</sup>もおり、その紡いだ糸を質織りしていた。チュリハール<sup>7</sup>はチューリーをこしらえ、ピサーティー<sup>8</sup>は糸まきなどのこまごましたものを外から仕入れてきて売ったり自家製造したりしていた。ムスリムはチュリハール、ピサーティー、タウィー<sup>9</sup>、ダルジー<sup>10</sup>、ジュラーハーといったカーストに限られていた。シャイクとかサイヤド<sup>11</sup>を名乗る人たちは一人もいなかった。ヒンドゥーはブラーフマン（バラモン）、ラージブート<sup>12</sup>、プーミハール<sup>13</sup>、カーヤスト、コーヤリー、クルミー<sup>14</sup>、カムカル<sup>15</sup>、トゥルハー<sup>16</sup>、ゴンド<sup>17</sup>、ドーム<sup>18</sup>、チャマー<sup>19</sup>、ドゥサード<sup>20</sup>など、あらゆるカーストの者がいた。最も人口の多かったのはたしかラージブートだった。そのうちの一部は由緒ある立派な家柄とされている地主層に属し、他は普通の百姓だった。カーヤストはジーラーデーイ村には5家族あったが、そのうちの3家族は私の縁家で、他はよそから移住して来た人たちだった。

たいていのものは村で手に入るものだから村から出る機会は減多になかった。村では週に2日は市が立った。近くの村々から商人たちがそれぞれの商いの品を頭や牛馬の背に載せたり、あるいは、牛車や馬車に積み込んでやって来た。市には菓子屋もやってきたし、魚や肉類も手に入った。それでも手に入らぬものがあれば、シーワーン<sup>21</sup>に行くことになっていた。シーワーンには警察署があり、治安判事がいる。役所や裁判所もあり商店もある。この町は当時の田舎の人たちにとってはとても重要な役割をもっていた。私の記憶では、田舎では親戚でもなければよそから人の訪ねて来ることは減多になかった。私た

ちの家庭教師のところへは3、4ヶ月に1度ほど、ベルシア語のちよつとした本を一包み、それに（今日のブルー・ブラックのインキとは違う）墨汁を一瓶か二瓶持つてくる行商人がいた。その行商人に私たちが子供は飽かず好奇の目を向けたものだった。また、冬に時折オレンジやレモンを売りに来ようものなら私たちはすばらしい宝物でも手に入れたように喜んだものだった。ある日のことこのような商人がやって来たものだから私は走って母に告げに行った。そして家からまた駆け出そうとしてなにかにつまづき、激しい勢いで倒れたものだから唇に怪我をして血が出た。その傷痕は永い間残っていた。またなにか別の物の時だったが、やはりそのように駆けていて転んだ。その傷痕は今なお右眼の下に残っている。田舎では果物といえば、マンゴーの出る頃にはマンゴーだが、それ以外は時々果樹園でとれるバナナしかなかつた。私たちがヌーヌーと呼んでいたおじはチャプラーから時々ぶどうを買つてきてくれた。ぶどうはその頃は今日のように房についたままではなく、綿を敷いた小さな木箱につめて売られており、値段も相当なものだった。そういうわけで村人たちはマンゴーとバナナだけその季節に食べることが出来るということだった。

村にはちっほけな僧院が2院あり、それぞれにサードゥ（修道僧）が一人ずつ住んでいた。村人たちは食事を提供し、サードゥは朝夕鈴や鐘を鳴らし燈明を捧げて<sup>22</sup>お祈りをしていた。お祈りの時間には村人たちも幾人かが集まってくる。時々私たちもそれに加わってはサードゥからトゥルシーの葉<sup>23</sup>をいただいていた。ラーマナヴァミー<sup>24</sup>や特にジャンマーシュタミー<sup>25</sup>の際には僧院の飾りつけが行われた。子供たちはみな色紙や金紙や銀紙で花をこしらえてはその神殿の入口や台座に飾りつけた。儀式にも加わつたし、断食もした。ダディカーンドー<sup>26</sup>の時にはうこんを混じたダヒー（凝乳）をうんとかけ合つて遊んだものだった。ほとんど毎年のようにカールティカの月（太陽暦10月～11月）になるとだれかバンディット<sup>27</sup>がやって来ては、1ヶ月か1ヶ月半の間、『ラーマヤナ』、『パーガヴァタ・プラーナ』<sup>28</sup>、あるいは、なにか他のプラーナ聖典の物語を語って聞かせた。物語の完結する日には村人がみな集まってなにかがしかのお供えを捧げる習わしになっていた。私の家からのお供えが一番多かつた。というのは、私の家がそのような家柄に見られていたからであり、物語もたいていは私の家の前で語られることになっていた。また、その経費も私の家が賄うことになっていた。村のパンチャーヤット<sup>29</sup>の催す物語となれば、村中の家が順番にバンディットの食事の世話をする事になっていた。私の家もその中に入っていた。夜にかけてのことなので私たちが子供は物語をあまり多くは聞けなかつた。とりわけ私には夕方になるとすぐ寝てしまう癖があつたからである。もつとも、燈明を捧げてのお祈りの時間になると起こされてお供えのおさがりを食べさせてもらつていた。

もう一つ村人たちの娯楽と教育に役立ったのは、ラーム・リーラー<sup>30</sup>（芝居）であつた。これはアッシュヴィンの月（太陽暦9月～10月）に行なわれる。ラーム・リーラーを演ずる一座がどこからともなく現われては半月以上もの間賑わせたものである。リーラーは隣村のジャマープルで演ぜられること

もジーラーデーイー村で演ぜられることもあった。この芝居も一風変っている。ラーマやラクシュマナ<sup>31</sup>などに扮する人たちは無学なので、舞台裏で一人の男がトゥルシーダース<sup>32</sup>の『ラーマーヤン』を手にして小声で、「ラーマさまが仰せになつた。シーターよ」、などと言う。すると舞台上のラーマがそれを大声で復唱する。役者はそれぞれこのようにして教えてもらった台詞を復唱するのであった。観衆は登場人物の言葉のやりとりをさほど楽しんでいるわけではない。というのは、観衆もとても大勢の上に舞台も百ヤードから二百ヤードも広がっているからである。それよりも登場人物の動きや特に戦などの立廻りが楽しみなのである。北方にラーマの城、南の方角にはラーヴァナ<sup>33</sup>の城がつくられる。あるいは、アヨーディヤー<sup>34</sup>やジャナカブラ<sup>35</sup>の都城のセットがつくられるということであつた。毎日、当日の段落に因んで仮行列もそれなりのものが出たが、なんといってもラーマの結婚式、ランカー島<sup>36</sup>での戦闘、それにラーマの灌頂式、すなわち、即位式<sup>37</sup>が圧巻だつた。結婚式の当日は象や馬を借り集めて結婚式の花婿の行列<sup>38</sup>そのままの飾りつけをする。ランカー焼打ちの日にはちよつとした建物までつくられ実際に火が放たれる。ハヌマーン<sup>38</sup>や猿共、それに悪鬼の様々な面があり、役者たちはそれらを適宜に着用していたが、私たち子供には本当に恐ろしいものに見えたものだ。猿の衣裳はたいい赤色をしており、悪鬼のは黒色をしていた。ラーマ、ラクシュマン、ジャーナキー<sup>39</sup>の衣裳は特別跳えになっており、その着付けや化粧には2時間ほどもかかる。リーラーは夕方の4時から6時にかけて演じられる。ラーマやラクシュマンは普通の人のような歩きぶりをせず、足を高々とあげて歩む。戦の時には立廻り独特の訓練が施される。即位式の日には村や近辺の人たちがお供えをラーマの足下に差出す。食事以外にリーラーを演ずる人たちに実入りがあるのはすべてこの日に限られる。翌日はラーマ、ラクシュマン、ジャーナキー<sup>39</sup>に美しく着飾らせて檀那衆の家々を回る。そのような家庭の婦人たちは深窓制<sup>40</sup>のため人込みの中にリーラーを見物に行けぬことになっている。そこで、婦人たちは訪れたラーマたちを拜み、祝儀を出すのであつた。

子供時分から私が感銘を受けたものの一つに『ラーマーヤン』の読誦がある。村には文字の読める人はほとんどいなかつた。その頃、小学校<sup>モウルヴィー</sup>やその他の学校は村にも近辺の村にも一校もなかつた。私たちが習つた家庭教師への謝礼は、食事付きではあつたが、月額3、4ルピーだつた。村には、カーストはジュラーハーだつたが、カイティー文字の読めるムスリムがもう一人いた。その男はムルカッティー算術<sup>41</sup>も知っていた。この算術には掛算のほかインドの度量衡による商品の売買や田畑の測量術も含まれている。その男が塾を開いていたので、村の子供たちが幾人か習いに行つていた。文字の読めたのはごく少数の人たちだつたが、毎夕、幾人かがどこかに、たとえば僧院<sup>と</sup>かだれかの家の軒先とかに集まつてはその中の一人が『ラーマーヤン』の四行<sup>チャウパーイー</sup>詩を讀誦する。他の者はそれに続いてその句を歌う。それと同時にシンバルや鼓を打つ。讃歌の部分はラーマーヤナの讀誦の始まるたびごとに繰り返し歌われる。このようなわけで文字を知らなくてもラーマーヤナのチャウパーイーを知つて

おり暗唱できる人たちがかなりいた。とりわけ讃歌となっている<sup>ドハー</sup>二行詩はたい  
ていの人が暗唱していた。

祭りの中で一番人気があるものといえばホーリー祭<sup>42</sup>である。この祭り  
には金持ちも貧乏人もない。ヴァサンタ・パンチャミー<sup>43</sup>の日からホーリーの  
歌がはじまる。村ではそれを「歌い出し」と呼んでいた。その日からパールグ  
ナ（太陽暦の2～3月）の満月の日までシンバルや鼓を持った人たちが集まっ  
てはホーリーの歌を歌う。時にはジラーデーイー村とジャマープル村との間  
で歌合戦になる。一方が一曲歌いおえると他方が始めるという具合である。ま  
た、時には近くの村からも連をつくってやってきてはこのような楽しい競争に  
熱中するのであった。一度は両村の間の競争になり、ついに夜の明けるまで続  
いたが、夜が明けてから説得されてやめたことがあった。これは私の記憶にも  
残っている。この歌に合わせて鼓を打つ人はかなりの力を要するので汗だくに  
なる。一方の村の方は鼓を打つ人は一人しかいなかった。夜通し打ち続けたの  
でその男は手にまめができてしまったが、村の名誉のためにもやめるわけには  
ゆかぬ。まめはいくつも出来てはつぶれたのだが、村の名誉もありついにやめ  
なかつた。このことはその競争が終わった後、朝になってわかった。皆はその  
男の気力を大いに讃えたことだった。

ホーリーの日にはひどい悪口やひわいな言葉のやりとりがある。それに  
は老若を問わず子供までも一枚加わる。村の一角から一団が現われ、軒毎に誰  
彼の名を呼んで悪口を言い、泥や砂などを投げ合いながら村の端まで行く。  
これが長幼の序がなくなる唯一の機会であったが、長幼の序だけでなく、カー  
スト間の差別意識もなくなるのであった。チャマール、バラモン、それにラー  
ジブートが互いに悪口を浴びせては泥をかけ合う。だれか見知らぬ人がきれい  
ななりをしていようものならその人は観念しなければならなかつた。皆がまる  
で泥をひっかけて自分たちのカーストに引き入れるのが自分の責任でもあるか  
のように思っていた。この泥かけの遊びは正后まで続く。それから皆は沐浴し<sup>44</sup>  
て各戸それぞれの祈りを捧げる。その日の御馳走はブリーとマールブワー  
ということになっている。貧しい人たちもそれなりのお祝いをする。食後はグ  
ラール<sup>45</sup>やアビール<sup>46</sup>を塗り合ったり、投げつけ合ったりして遊ぶ。みんなが白  
い服を着て、それに赤や黄色の色水をひっ掛け合ったり、アビールや石英<sup>アブラク</sup>の粉  
を投げ合ったりする。ココナツやナツメヤシの実、パーンやびんろうじなどが  
振舞われ、ホーリーの歌がさかんに歌われるということだった。

聞くところによると、よそではその日は大いに酒盛りをしたり、肉を食  
べたりする風習があるとのことである。だが、幸いなことに私たちの村では一  
度も見かけなかつた。私たちの村のラージブートやブラーフマン、それにブー  
ミハルは飲酒を罪悪だと考えている。地方によつてはカーヤストで酒を飲む者  
がいる。しかし、私たちの家では古くからのしきたりがあつて飲まないことにな  
つており、一族のもので酒を飲む者は癩病に罹ると信じられている。そうい  
うわけで私たちの村のカーヤストはだれも酒を飲まなかつた。若い者も年長者  
を見習つてそれには手を出さない。これは今でも続いている。

ジャンマーシュタミーやラーマナヴァミーについては先に触れたが、ディーワーリーの祭り<sup>47</sup>もなかなか盛大だった。祭りが近付くとどの家も美しくなる。壁が真白に塗りかえられたり、柱や戸が油で磨き上げられる。当時、燈油は使用されていなかった。多分、手に入らなかったのだろう。からし油、亜麻仁油、けしの実油、ひまし油などを燃していた。ディーワーリー祭には金持も貧乏人も相応に素焼きの小皿の燭台に燈火をともしたものだった。金持ちの家では隅々にまで燈火をつけ、バナナの木の柱を地面にいけて建て、竹でアーチをつくる。燈火のつくり出す様々な絵模様がとても美しく、目を楽しませてくれたものだ。大人たちが燭台の置き場所を決め、子供たちはその指定の場所に燭台を置いたり、それに油をさしたり、あるいは火をともしたりする。夕方灯のともる前にラクシュミー神<sup>48</sup>にお祈りを捧げる。まず、ラクシュミー神像とトゥルシーに燈明をあげ、続いて他の場所にも明りをともす。明りがともってから賭けごと<sup>49</sup>をすることになっていた。私たちがするのはいわば名ばかりの賭けごとだったが、本当にお金を賭けている人たちを見たことがある。ディーワーリーには特別の燭台が用いられる。だが、カールティカ月いっぱいにはランタンをトゥルシー・チャウタラー<sup>50</sup>に置いたり、宙につるしたりしている家もあった。

ダシャラー祭り<sup>51</sup>は主にザミーンダールたちの祭礼と考えられていた。しかし、ナヴァラートラ<sup>51</sup>の期間にはカーリー女神<sup>52</sup>が祀られることがしばしばあった。この時はカーリー像が運んでこられ、大変盛大に祀られた。私たちの村ではカーリー祀りを見たことはなかったが、近くの村で祀りのあったことがある。大変な評判になったので私たち子供も見物に行かせてもらった。そこに行くと文字通り真黒で手には真赤に染まった頭蓋骨と刀を持ったカーリー像を拝んだ。ラームリーラーのラーマの即位式もたいていはダシャラーの日か、その一兩日前後に行なわれることになっていた。ダシャラーの当日には大伯父が家族全員を引きつれ、まるで小さな行列が進むようにしてシヴァ神を拝みに行くことになっていた。

もう一つ皆が一緒に祝う祭りがあった。アナンタチャトゥルダシー<sup>53</sup>の断食である。これはインド暦6月、すなわち、バードン月の白半の十四夜に行なわれるもので、正午まで断食をする。正午に縁起物語<sup>54</sup>を聞いた後でプーリーヤキール<sup>55</sup>を食べる習わしで、夕方はなにも食べない。日没後は水さえ飲んでならぬ。この断食には私たち子供もみな加わった。この祭りの縁起物語を聞き終わると、子供たちにはとても楽しい所作が待っていた。バンディットは大きな金桶にきゅうりを1、2本入れて水を少し注ぐ。物語を聞いた人は全員この金桶に手を入れる。バンディットが問う。「なにを捜しておるか」皆が答える。「アナンタバル（無窮の果）を」バンディットが問う。「見つけたか」答えて言う。「見つけた」バンディット「頭にかける」皆は頭に水をかける。この所作が終わると、皆は糸に14の結び目をつけてつくったアナンタ（お守り）<sup>56</sup>を授かる。皆はそれを左腕に結ぶ。私たち子供のアナンタには美しい色のものや時には絹でこしらえたものが玉造り職人から買い求められることにな

っていた。中には一年中そのアナンタを腕にまきつけている人もいた。そういう人は丈夫なアナンタを自分でこしらえ、かなり長くして、簡単に結びつけられるように工夫していた。こうしてアナンタを結ぶ人は肉や魚は口にしなかった。同じくトゥルシーでこしらえた首飾りや数珠をつける人も肉や魚は口にしなかった。物語会、ラームリーラー、ラーマヤナの読誦、あるいは、この種の戒行や祭礼などにより村ではいつも宗教活動が続けられていた。それにムハッラム<sup>57</sup>にはタージャー<sup>58</sup>を祀る習わしもあった。それにはヒンドゥーも参加した。ジーラーデーイ村でもジャマール村でも富裕なのは少数のヒンドゥーばかりだったので、その人たちがこしらえるタージャーは貧しいムスリム<sup>59</sup>のものよりも大きくて立派だった。ムハッラムの期間中、毎日のように木剣<sup>60</sup>、棍棒、<sup>61</sup>楯などを用いた棒術や剣術の演技が行なわれる。10日目、すなわち、最終日の人出は大変なものだった。村中のタージャーがカルバラー<sup>61</sup>に運ばれる。その途中、ひっきりなしに「あゝアラー、あゝイマーム」という追悼の掛声かけられ、木剣などの演技がくりひろげられる。熱の入れようは大変なもので、この時はヒンドゥーとかムスリムとかいった区別はすっかりなくなってしまう。菓子やティチャウリー（水にひたしておいた米と黒砂糖）が振舞われ、みなはそれを有難く頂戴するのであった。だが、ヒンドゥーはムスリムが触れた水や果汁シロップは飲まない。<sup>62</sup>もつとも、ムスリムもそれを不快なこととして受取ることはなかった。それをヒンドゥーの本分と考え、かえってムスリムのほうがそのような場面に出くわさぬよう気を配るほどだった。

ムハッラムにヒンドゥーが参加するようにムスリムもホーリー祭には一緒になって騒いだ。私たち子供はダシャラー祭やデーワーリー祭、あるいは、ホーリー祭には家庭教師<sup>63</sup>の先生が詠まれたイーデー<sup>63</sup>を親や年寄りたちに聞かせてはお金をもらい、それを先生に差上げていた。私たちは数日前からイーデーを憶える。そして先生に手助けしていただいて紙に赤、緑、青、紫などの美しい花を描く。先生はそれに達者な筆使いでイーデーを書いて下さる。私たちはそれを家へ持ち帰り読んで聞かせるわけである。それに書いてあることも一風独特のものだった。たとえば、デーワーリー祭の色紙には次のように書いてある。「デーワーリーは賭博のざわめきを伴い来たれり」とか、ダシャラーの色紙には、「ダシャラーの日にラームチャンドル（ラーマ）は行者に身をやつして都を出でにけり」、とか書いてあった。先生には毎月<sup>64</sup>の月謝のほか木曜日毎にジュメラーティー<sup>64</sup>として、また祭りにも色紙をいただく代りに心ばかりのものを差上げていた。

その頃は村でのめごとというのはいまよりなかった。なにが事があれば村の世話役<sup>65</sup>たちがそれを解決することになっていた。もし世話役でも扱いかねるようなことがあると私の大伯父かおじのところへ持込まれる。大伯父やおじもパンチャーヤットに加わってそれを処理する。もつとも時折盗難事件の発生することがあった。村のパニヤー<sup>66</sup>たちは小金をためていたのだから、盗人たちは、それらの家に夜中侵入しては少しの金を盗んでいくのであった。私の記憶していることだが、一度は夕刻、よその村の市場から帰る途中、追刺ぎに金

と衣類を奪われた人があつた。このような事件があると警察から警部補が部下を率いてやってきて2日ほど村に泊まる。警察のお出ましとなると村は大騒動だつた。村中に緊張がみなぎる。疑わしい人がいると、家宅捜索が行なわれる。村には手癖がよくないとされていた人が2、3人いたので、警部補はやってくるとすぐさまその人たちを捕えて後手に縛り上げ、投げとばしたり、ひどくなくりつけたりする。近くの村にも嘘か真か同じように盗癖があると信じられている人たちがおり、その人たちも縛り上げて連れてこられ、投げとばされる。このようにして同時に6、7人もの人が縛り上げられた上、投げとばされて地面に何時間も倒れていたのを私も目撃したことがある。

私の家は僅かばかりの土地を持っていたが、小作との争議は少なく、裁判所に用のできることもほとんどなかつた。だが、私の家が土地を持っていたのと同じ村にやはり土地を持っていたある地主との間には僅かの土地のことで長い間裁判沙汰が続いた。祖父の代に始まって父の代を過ぎ、父の死後ようやく兄が和解することにして決着をつけたようなことだつた。ヌーヌーおじはチャプラーによく出かけたので、出かけた折はチャプラーの学校で学んでいた兄の様子を見に行ったり裁判所に出かけたりしていた。

(註)

1 Pān きんまの葉に種々の薬味・薬品を調合したもので、インド人の嗜好品。

2 Bīrī 粗製葉巻き。

3 ハッレー、バヘーラー、ピーパル Harreもしくは, Harrā —ミロ balan (Myrobalan, Terminalia Chebula), Baherā —ミロ balan (Belleric Myloban, Terminalia belerica), いずれも果実が薬用。Pīpar — こしょう科の植物 (Skt. pippali) で薬味、薬用となる (long pepper)。

4 Koyarī, Koirī, Koerī 北中部インドに住む野菜栽培を主たる生業とするカースト。Kāchhīとも呼ばれる。

5 Ahīr 北部・中部インドに住み、牧畜業や農業に従事するカースト。牛飼いが多い。

6 Julāhā 北中部インドに住むムスリムの織工カースト。

7 Curīhar, Curīharā 女性が着用する(金属・ガラス・角などを材料にした)手首飾りの製造販売に従事するカースト。

8 Bisati 普通、化粧品や裁縫用品などの小間物の行商人をさすが、ここでは製造にも従事していたことがわかる。

9 Thawāī レンガ職人、左官の仕事をする。ラージ (Rāj)ともいう。

10 Darzī 本来、仕立屋を生業とする。

11 インド亜大陸のムスリムの中でアラブ、ペルシア、アフガン、ムガルなどの血統を継ぐと称する人々は、それ以外の人々(主として下層ヒンドゥー・カーストからの改宗者)と社会生活上区別される。そして前者の中でも上下の関係が見られるようである。H. Risley の前掲書〔註1-(3)〕によれば、次の

ような諺が北部インドにひろまっていた。“Last year I was a jolaha ; now I am a Sheikh;next year if prices rise, I shall become a Sayid.” ( P. 121 )

この諺からもこのような区別が階級的な側面を持っていることは否めないが、婚姻上の制約要因としても機能してきた。同書によれば、たとえば、ベンガルのムスリムは、(1)上述の外來のムスリム及び最高カーストのヒンドゥーの改宗者から成る Ashrāf もしくは Sharif (高貴なる) と呼ばれる集団と(2)その他の Kamīnā とか Ajlāf (下賤) と呼ばれる集団とに分かれる。( P. 122 )

シャイク (もしくは、シャイフ Shaikh ) とは、本来、アラビア語で、ウルドゥー語やヒンディー語では、年長者、長老、族長、聖者などの意にも用いられる。もともと、アラブの正しい血統を継ぐことを指すが、インド亜大陸のムスリムの中では上述のように「高貴の」出身とされる人々を指す称号である。もちろん、これにはインドでの改宗者も含まれているが、これを称する人たちサイヤド ( Saiyad ) に次いで高貴なものとされる。サイヤドとは本来、教祖マホメットの血統を継ぐ者の意であるが、上述の Ashrāf の中で、最も高貴であるとされる。英語綴りでは Syed となる。

なお、ちなみにムスリムの婚姻について触れておく。「概して、高階級のムスリムの社会は内婚への傾きを示す上位婚を骨組みにして成っているのに対し、職業的な集団である低い階級のムスリムは厳格に内婚を守っている、と言える。」( The Imperial Gazetteer of India, The Indian Empire Vol. 1, London, 1909, P. 329 )

12 Rājput ラージャスターン地方を中心に西部・北部・中部インドに多い。いわゆるクシャトリア ( 武士・統治者 ) 種姓に属すとされるカースト。

13 Bhūmihār ビハール地方を中心に北中部インドで農業に従事する。バラモン種姓に属すると自称。Bhuinhār, Bābhan と呼ばれる。

14 Kurmī 北インド一帯、特にビハール、東部 U. P. に多く、農業に従事するカースト、地方によつては Kunbi と呼ばれる。

15 Kamkar 主として裕福な家庭での使用人として、水汲みや屋内の掃除といった家事労働や雑役に従事するカースト、Kahārともいう。かごかきや農業労働者もいる。

16 Turāhā 不詳。ベンガル地方の楽士カースト ( Turāhā ) と同じ？

17 Gond 中央州北部を中心にオリッサ、ビハール、その他の地域にも分布している有力な部族民。15, 6 世紀には中央州ゴンドワナー地方に独自の王国を築いたことがある。現在は居住地によつて生活形態が異り、農業 ( 労働者 ) に従事する者もいる。

18 Dom 北・中部インドにひろく見出される。かつては有力な部族であったようだが、今日ではいわゆる不可触賤民とされ、掃除人や隠亡として働いたり、死獣処理などに従事することが多い。下級の音楽士もいる。一部はかご、みなどの竹細工にも従事。

19 Oamār, 英語綴り Chamar 本来、皮革業を生業とするカースト。



20 Dusādh 養豚業に従事することが多いとされるが、村の番人などもつとめる。

21 サーラン県シーワーン地区の中心、シーワーン市の人口は1961年の国勢調査では27,401人。この地方も砂糖きびの栽培が盛んである。

22 Ārtī (Skt. ā-rātrika) 燈明や香をたいて盆に載せたものを回しながら捧げ、神像や高貴な人、客人を拝む礼拝様式。

23 Tulsī-dal トゥルシーは、めぼうき、しそ科の草本。葉や根が芳香を有し、葉は薬用(解熱剤)にもなる。ヒンドゥーが聖なるものとしてあがめる。この葉をヴィシュヌ派信徒は非常に神聖視し、神前に供え、おさがりをいただく。

24 Rāmanavamī インド暦1月=チャイトラ月(太陽暦3~4月)の白半9日に祝われるラーマ神の降誕祭。

25 Janmashtamī インド暦6月(8~9月)の黒半の8日に祝われるクリシュナ神の降誕祭。

26 Dadhikāndo ジャンマーシュタミー祭にダヒー(凝乳)にうこんの根からとった粉末を混じたものをかけ合う祝いの行事。

27 Paṇḍit 普通、学者や学問を修めたブラーフマンを指す。ここではKathāvācakと呼ばれ、職業的に『ラーマーヤナ』や『マハーバータ』といった叙事詩やブラーナ聖典などの一部や全部を語りながら併せて説教もする人を指す。

28 Bhāgavata Purāṇa 神話・祭祀・歴史などの集成であるヒンドゥー教のブラーナ聖典のうち代表的な十八ブラーナの一。(特にその第十章が)クリシュナ神の生涯について詳しく、ヴィシュヌ派信徒に重んじられる。近代インド諸語への翻訳や翻案も多い。

29 これは一村落の自治組織として機能したパンチャーヤットである。村にはこのほかカーストの自治組織として機能してきているカースト・パンチャーヤットがある。村落パンチャーヤットは政治的・社会的・経済的変動により大きな影響を受けた。特にイギリス支配の強化や独立運動の経過の中で種々な変容をとげてきている。1920年以降には、政府の指導下に法制上の組織化も行なわれ、また、独立インドでは、地方自治の強化・確立という観点から村落全体の生活に密着した建設・環境衛生・農業改良・手工業振興・仲裁などの多方面にわたる自治組織として位置づけられてきている。ここに言及されているのは、そうした法制化がなされる以前のものであるが、実際的な影響力は大であった。なお、カースト・パンチャーヤットは村落ばかりでなく、地区や県、州、時には全国的な連帯を有するものである。

30 Rām Līlā 叙事詩『ラーマーヤナ』(普通、トゥルシーダース(1532-1623)の東部ヒンディー語による翻案『ラームチャリット・マーナス』)を題材にして特にダシャー祭に北インド一帯の町や村毎に演じられる演劇。職業劇団によって上演されることもあるが、一般にはそれを催すコミュニティーの中から選ばれた素人が出演する。この行事はそれぞれのコミュニティー

一の代表によって遂行される。ラームリーラーについては Norvin Hein, *The Rām Līlā* (Milton Singer (ed.), *Traditional India ; Structure and Change*, Philadelphia 1959) が詳しい。

31 『ラーマヤーナ』の主人公ラーマはアヨーディヤーのダシャラタ王の皇太子であるが、ヴィシュヌ神の化身とされる。ラクシュマナはラーマの異母弟であるが、兄に忠実で、両者の関係は兄弟愛の理想像とされる。ラーマは異母弟バラタに王位を譲り、自らはラクシュマン及びシーターと共に14年間の国外追放を父王の命として拝す。

32 *Tulsīdās, Gosvāmī* 上記、第2章(註)8及び本章(註)30を参照。その著『ラーム・チャリト・マーナス』(略称、ラーマヤン)が北インドのヒンドゥーに深い感銘を与えてきている。他に、'Vinaya Patrikā', 'Gī-tāvalī', 'Kavitāvalī' などブラジ語による著作も遺している。

33 *Rāvaṇa* シュリーランカー(ランカー)島の魔神、ラーマの妃シーターを誘拐するが、最後にラーマに敗れる。ラームリーラーは大きな広場に舞台装置を設けて演じられる。この城のセットは後述のように焼き払われる。

34 *Ayodhyā* 上記(註)31を参照。今日の北部州東部ファイザーバード県のコグラー川沿岸に位置。ダシャラタ王の都。

35 *Janakapūra* 今日のビハール州東北部、ミティラー(Mithilā)の都、シーター姫の父Janaka王の都。

36 *Lankā* ラーヴァナの都城があったとされる、スリーランカー(セイロン)島。ラーマの率いる軍勢が攻め込み、大合戦の後、ラーマの軍勢が勝利を取める。(註)33参照。

37 即位式 ラーマがラーヴァナを退治しアヨーディヤーに帰還後、即位する。

38 *Hanumān* 『ラーマヤーナ』に登場する猿軍の将で、ラーマのために大活躍をする。今日では神格化されており、厄除けの神とされる。

39 *Jānakī* シーターの異名、「Janaka王の姫」の意。

40 *Pardā* 本来、ペルシア語で、「幕・カーテン・ベール、など」の意をもつが、ここではムスリムの子やヒンドゥーの一部上流家庭の子を深窓に置き、外界、特に家族以外の男性との接触を制限する風習を指す。もつとも第6章に見られるように家庭内においても大変複雑かつ厳しい女性隔離の風習があったようだ。

41 *Murkaṭṭī Hisāb* 詳細不明。

42 *Holī* インド暦の12月、すなわち、パールグナ月(2~3月)の満月の日を本祭りにしてヴァサント・パンチャミーの日から祝われる豊作祈願祭。満月の前夜に火祭りがあり翌日、色水をかけ合う。

43 *Vasanta Pancamī* インド暦の11月=マーガ月(1~2月)の白半5日に祝われる。この日寒期が終わり春に入る。学問の女神サラスヴァティー(*Sarasvatī, Shrī*)を祀るため、*Shrī Pancamī*ともいう。

44 *Pūrī* は小麦粉をこねてせんべい状にし、精製したバターで揚げた

もの。Malpua も同様にしてつくるが、砂糖を加える。

45 Gulāl　これは、ひしの実や穀類などの粉を辰砂やサフランの花を用いて赤色や紫色に染めたもので、ホーリー祭の時、互いに塗りつけ合ったり投げ合ったりして遊ぶ。

46 Abīr　これもやはりホーリーの際、グラールのようにかけ合ったり投げつけ合ったりする赤い色粉で、ひしの実を粉にし、うこんや石灰などを混じてつくる。

47 Dīwālī　ないし、Dīpāvalī。インド暦の8月・カールティカ月（10～11月）の朔日を中心にその前後の5日間にわたり行なわれる。商人たちの祭りとしての色彩が濃く、富の女神ラクシュミーをまつる。商人たちにはこの朔日から新年度が始まる。

48 Lakṣmī　ヴィシュヌ神の配偶神で富と幸運の女神とされる。

49 この日、賭けごとをするのは、この日賭けごとに勝てば一年中幸運に恵まれると考えられているからである。

50 Tulsī-cautarā　先述のように〔註4 (23)〕、ヒンドゥーに神聖視されるトゥルシーは一部の家庭では中庭に設けられたチョウタラー（壇）や鉢に植えられている。これは Tulasī-gharā とともに Tulasī-thalā と呼ばれる。

51 Dashaharā　インド暦7月・アーシュヴィナ月（9～10月）の白半朔日から十日にかけてインドで広く祝われる。十日目は勝利の十日（Vijaya Dashamī）と呼ばれる。先述のラームリーラーもこの祭りの一環である。ベンガル地方ではこの九日目までがドゥルガー祭（Durgā Pūjā）としてドゥルガー女神がまつられる。これはナヴァラートラ（Nava Rātra）祭とも呼ばれる。

52 Kālī　デーヴィー、ないし、マハーデーヴィー（Devī, Mahā Devī）と呼ばれるシヴァ神の配偶神は多数の異名、異形を有しており、ドゥルガーやカーリーはその一。カーリーとは「黒き女神」の意。これはベンガル、ビハール地方を中心に尊崇される。その姿態がすさまじい。

53 Ananta Caturdashī　インド暦6月（陽暦8～9月）の白半14日に祝われる祭り。アナンタとはシェーシャ龍（Sheṣa Nāga）を指すが、これはヴィシュヌ神の化身であり、ヴィシュヌ神の床となり、また、大地を頭上に支えているとされる。この祭りはヴィシュヌ神とシェーシャ龍とをまつるものである。

54 Kathā　ヒンドゥー教の祭りや戒行の際に、プラーナ聖典などに伝えられているそれらにまつわる伝説や由来をバラモンや学僧に語ってもらうと大變御利益があるとされる。

55 Khīr　米に砂糖を加え牛乳で煮たもの。

56 Ananta　正式には14本の絹糸をより合わせ、それに14の結び目をつけたもの。

57 Muḥarram　イスラム暦の1月1日から10日間、マホメットの女婿

アリー（第四代カリフ）の次男フサインがウマイヤ・カリフ朝との抗争のためカルバラーで殉教（680年10月10日）したのを追悼する祭りで、シーア派には特に重要な祭礼。ムハッラムはイスラム暦の第1月の名称である。

58 Tājiya, Ta'jiya 上述のイマーム・フサインの陵の模型。竹や紙などを用いてつくる。この前で殉教のフサインを追悼する。これをかかえて練り歩きもする。十日目にはこれを埋葬する。

59 Gadkā 剣術に用いられる木剣。

60 Phariī ガドカーによる剣術の際、防具として用いられる革製の楯。

61 Karbalā イマーム・フサインの殉教地にちなんだ、既述のタージャーの埋葬される場所。

62 ヒンドゥーの飲食に関する浄・不浄の観念では、ギー（Ghi）、すなわち、精製バターを用いた料理、乳製品、煮てない穀類は下級カーストや異教徒の手から受けて食べてもそのためにいわゆる「汚染・不浄化」されることはないが、水や水を用いて料理したものを食べれば「不浄」になるからである。

63 'idī (1)祭りを詠んだ詩、(2)それを書いた色紙、(3)家庭教師が詠んだ(1)の謝礼（生徒が親に読んで聞かせてから受け取り、それを先生に差上げる。）

64 Jum'arātī 「木曜日の」という意。この日は一般に布施や施しの日とされているので、先生へ贈物をしたものと思われる。

65 Panc パンチャーヤット〔本章4(29)参照〕の役員、世話役。

66 Baniyā 本来、「商人」の意。商業に従事するカーストの者や金貸しを指す、総称的な呼称。したがってこれは多数の副カーストに分かれる。しばしば、穀物や雑貨を商う小商人を意味する。

## 5 英語教育<sup>1</sup>

先にも触れたが、兄がいたおかげで私はなにをするにしても楽だった。まだ私がずいぶん幼かった時分、兄は勉学のため最初、シーワーンにやられていた。しばらくは同地にいたのだが、勉学上これという便宜も得られなかった。というのは、一つには当時、シーワーンにはハイスクールが一校もなかった。それに学校そのものがあつたかどうか私の記憶にない。しかし、理由の一つは託されていた人が兄を抜いきれなかったことにある。シーワーンには祖父の親交のあつたアグラワール・カースト<sup>2</sup>の人が住んでいたのだから、兄はその人に預けられ、しばらく同地で、過ごした。その頃、その人の家の近くで井戸掘り工事が進められていた。すでに水が湧き出ていたが、井戸の周囲を煉瓦で固める工事はまだ完成していなかった。ある日のこと兄は井戸をのぞきに行ったのかその近くへ遊びに行ったのか、ともかくその井戸に落ち込み、危く溺死するところを助け出された。その人が、兄のようないたずら坊主は預かってはおれぬ、と書いてよこしたのだから、兄はすぐにチャプラーにやられ、その果立学校<sup>ラースクール</sup>に入った。兄は休暇で帰省すると、私たちにチャプラーや学校のことなどを話してくれた。私たち子供はその話<sup>に</sup>熱心に耳を傾けたものだ。物心ついで

てからその頃まで私は時折ラームリーラーやそのほかの<sup>メーラー</sup>市を見に近隣の村へ出かけた以外は多分どこへも行つたことはなかつたように思う。もつとも、まだ赤子も同然の頃、母に連れられて、<sup>シフ</sup>連合州のバリヤー県にある。私たちの村からはおよそ50キロの距離にある母の実家へ行つたことがあるそうだが、私は全く記憶していない。

私がチャプラーの学校に行くことが決まるとヌーヌーおじは、私を一度チャプラーへ連れて行き、いろいろと見せておいたがよいと考え、連れて行つてくれた。数日間、兄のいたところに泊まり、家に戻つた。記憶にある限りそれが私にとっては生まれて初めての汽車の旅だった。だが、その時はまだ、入学には至らず、村に戻ると再び<sup>モウルヴィー</sup>先生について勉強を始めた。そうこうしている最中に家に不幸があつた。ヌーヌーおじが亡くなつたのである。私たちの家はブーランプラサード・ヴァルマー氏の家とは深交があつた。このヴァルマー氏の御尊父は母方の祖父のもとで暮らしておられた。この祖父にあたられる方を私たち一家はいささか古くから存じ上げていた。存じ上げていたというよりむしろ両家は懇意にしていたといふべきであらう。そもそも両家がハトゥアー・ラージに仕えていたのが因縁で、それ<sup>以来</sup>の交誼であつた。ヌーヌーおじはブーラン・バーブーの御尊父の結婚式の行列に加わつて行つた帰りにコレラに罹つたのだつた。その時は一応よくなつて家に戻つたのだが、村でもすさまじい勢いでコレラが蔓延していた。おじは一度よくなつてから2、3週間後に再びコレラに罹つた。その日のことは今なお私の記憶に残っている。午前11時頃に症状が出始め、その日の夜には亡くなつてしまつたのである。父は薬石の限りを尽した。20キロほどの距離にあるダローリーから<sup>ダークタル</sup>西洋医に来てもらった。最初この病気に罹つた時はこの医者のおかげでよくなつたのだつた。しかし、当時はまだ速く走る乗物はなかつたので、夜中の12時に医者が着いた時にはおじはすでに息を引き取つてしまつていた。おじが亡くなつたので、家の中は大騒動になつた。大伯父にとっては一人息子であり、家事は内といわず外といわず独りで切盛りしていたからである。大伯父は70歳ほどになつていたが、ヌーヌーおじはまだ45歳にもなつていなかつたらう。父は家業にはあまり関心がなかつたので、なにかにつけ一層混乱を深めることになつた。したがつて私のチャプラー行きはしばらくの間お預けになつたというわけである。

ほぼ1年半後に私はチャプラーへ行くことになつた。チャプラーでは1ヶ月3、4ルピーの家賃で小さな家を一軒借りていた。兄は召使一人と料理人のカーヤスト一人と一緒に住んでいた。最初、しばらくの間、家庭教師にも来てもらつていたが、私が行つた頃にはだれにも来てもらつていなかつた。兄弟一緒に暮らすようになった。私はチャプラーに着いて間もなく、当時のジラー・スクールでは一番低学年の第八級に入った。この学校でアルファベットとデーヴァナーガリー文字を同時に習い始めたのだつた。兄はその時には第二級から第一級に進み、大学予科の入学準備をしていた。私には家庭教師はつかなかつたので、学校で習うこと以外になにかたずねることがあれば、兄にたずねることにしてた。家庭教師をつけてもらわなかつたことは私にはかえつて幸い

だった。おかげで学校の授業を真剣に受ける癖がついたし、早くから少し自信を持つようにもなった。学年末には兄は大学予科の入学資格を得るため試験準備をしており、私は年度末試験を受けることになった。私は試験の成績がとてもよかった。第八級で首席になったばかりでなく、点数も非常によかったものだから、校長はダブル進級、すなわち、1学年とびこえ2級上の学年への進級を考えてくれた。

校長はクシーロードチャンドラ・ラーイ・チョウドリーという有名な先生で、学識豊かな校長として知られていた。学校の中でもなかなかにらみがきいており、生徒は言うに及ばず先生方も校長の前に立つとふるえあがるほどの威厳だった。試験の成績が発表され、私は第八級から第七級に進級することになった。生徒たちがみな喜んでいたところへ小使がやってきて、担任の教師に校長が私を呼んでいる旨を伝えた。校長に呼びつけられるのはなにか悪いことをした生徒ということになっている。私はふるえ上がり、恐る恐る校長室へ行った。だが、そこへ行ってみると恐怖は失せてしまった。校長は「2学年特進して第六級に進んでみないかね」と仰せになった。私はその時、少々まごついてしまった。少しは嬉しく感じたが、思いがけないことであり、それに一挙に2学年進級した場合、途中の一学年の学力をどのようにして補うかという不安もあった。そこで私は、兄に尋ねてから御返事申し上げます、と答えた。すると校長は、「君が兄というのはだれのことかね」と尋ねた。私が兄の名前を言うと校長は吹き出してしまった。校長は兄を教えたことがあり、また、予科の受験を許可したのも校長であったから、当然のことながら兄を知っていた。兄は宿で試験勉強をしていた。校長は、「君は兄に尋ねたいと言うが、君の兄さんのほうがわしよりこのことについては詳しいだろうかね。。。まあよかろう。尋ねて来たまえ」と言った。私は校長室を出ると、まっすぐ兄のところへ駆けて行った。兄は、今は故人となったバーンケービハーリーラール・パーブー、それにモウルヴィー・シャフィー・ダーウーデーと一緒に受験勉強の最中だった。私はその旨を話すと3人とも大変喜んでくれた。兄たちはいろいろ話し合ったが、兄の考えでは、一度に2学年進級すると後でわからなくなつて勉強もうまくゆかなくなろう、ということだった。兄は私と一緒に校長のところへ行って自分の意見を述べた。校長は笑ってやはり私に言ったのと同じことを繰り返した。「君のほうがわしよりこのことについては詳しいというわけかね。」、というわけである。結局、私は第七級はやらずに第六級へ進級させられた。

間もなく兄はパートナーへ試験を受けに行き、試験が終わるとそのままジャーデーイー村へ戻った。それからは私はチャプラーの宿に独り暮らしすることになった。もつとも、召使と料理人はいた。それに村での勉強仲間だったジャムナー兄とガンガー兄もチャプラーに出て来て学校へ通っていたので、ここでも一緒にになり、一緒に勉強することになった。多分私が10歳から11歳にかけてのことである。

兄は予科入学資格試験に合格し、パートナーのカレッジに入ることになりパートナーへ行くことになった。私も兄について行かせてはどうかということに

なり、そうすることに決まった。そこで、私たち3人は兄についてパトナーへ行つた。兄はパトナー・カレッジに入学した。私たち3人は、当時、評判もとてもよく学生も多かった、ゴーシュ学院 (T. K. Ghosh Academy) に入学した。その学校に入ってみて2級特進については、やはり兄の言ったことが校長の言よりも正確だつたと感じた。毎日、いくつかの学課で級友たちのほうが私より多くのことを知っていると感じるのであつた。私は皆に追いつこうと努めた。パトナーでも家庭教師はつけてもらっていなかつたので、わからないところがあれば、兄と一緒にいた兄の友達に尋ねることにしていた。

チャプラーにいた頃からすでに私は毎夕、学校から戻つてなにか間食をするとフットボールやその他の運動をしにもう一度学校へ出かけるのが習慣になつていた。たいていはフットボールかクリケットをやつた。一部の上級生と先生がテニスをやつていた。わけても教頭が熱心だつた。パトナーでは学校の運動施設が十分ではなかつたので、私たちは大いに不便を感じていた。学校の敷地も広くはなかつた。それでも私たちは空いているところへボールを持って行つては少し駆けまわつてくることにしていた。兄は運動が上手で、フットボールやクリケット、等がとても巧みだつた。パトナー・カレッジでも名を知られていて、私たちは時折試合見物にパトナーの球技場へ行つたものだつた。

パトナーではサーワン月<sup>3</sup>の毎月曜日に立つ ソムワリメーラー 月曜日<sup>3</sup> がとても賑わつた。私たちはその市に出かけるのがとても楽しみで、兄にこまごましたものを買つてくれとせがんだものだつた。一度はとても美しい神像が欲しくてならず、どうしても買つてくれとせがんだものだから、兄はとうとう根負けして買い与えざるを得なくなつたこともあつた。一度はやはりその月曜市でバーンケー・ハーリー・パープーが掏摸に懐中のお金をすられたことがあつた。兄も一緒にいたので、掏摸が揃えられ、裁判にかけられると、バーンケー・パープーと兄は証言することになつた。その裁判を見物に行つたのが、私の記憶では裁判所に行った最初だつた。

パトナーでは、職さがしに田舎から出てきていた兄の親友が、私たちと一緒に暮らしていた。パトナーでもやはり家を一軒借りて、バーンケー・パープーと私たちは一緒に住んでいた。この兄の親友はちよつとした相撲取だつた。体操も少々心得ており、庭に小さな土俵を設け、皆に体操や相撲を教え始めた。一度バーンケー・パープーは相撲を取っている時にけがをしたのでしばらくの間は足が痛んで困つた。それからは相撲や体操にはあまり熱がなくなつてしまつた。

私たちはパトナーで初めて「ブレーグ」(ベスト) という病名を耳にした。そのときはこの恐ろしい病気のことをボンベイ市のこととして聞き流していたのだが、瞬く間にチャプラー地方にもこの疫病が入りこんで根をおろしてしまつた。それ以後この疫病は今日に至るまで連綿とこの地方に多かれ少なかれ禍をもたらしてきている。大飢饉が襲つたのもちよつとこの頃だつた。休暇になつたので村に帰ってみると役人たちが救援活動にやつて来ており、私の家を宿所にしていて。

パートナーには約2年間いた。兄は大学入学資格の試験を受け、私は第六級から第五級、さらに第四級へと進んだ。兄は試験を済ませると家へ帰った。私はジャムナー兄とガンガー兄、それに召使の他はだれもいないところで2、3ヶ月過ごした。夏休みに入ると私たちは帰省した。

(註)

1 ここでは英語の教育及び主として英語を媒介語とする西洋式の中・高等教育の意で、それまでの家庭教師についての教育とか伝統的(宗教的)古典教育とは異なることを示す。

2 Agrawal アガルワラーとも呼ばれる。北部インドに多い有力な商人カースト。ヒンドゥーとは限らず、ジナ(ジャイナ)教徒もいる。こうしたカースト名や副カースト名は概ね苗字になると考えてよい。

3 インド暦の5月、陽暦の7～8月にかけて。

## 6 結 婚

自分のことでありながら明確なことは記憶していないのだが、第五級か第四級にいたところに結婚した。多分第五級の時だったろう。式は夏休みに挙げた。私たちがチャプラーの学校に行っていた時にすでに大伯父も祖母も亡くなっていた。私たちは二人が病気だという報せでチャプラーからジラーデーイー村に戻った。二人は家族全員の見守る中で僅か数日を間にはさんで亡くなった。したがって次は私の父が戸主となった。私の結婚の取決めも父がしなければならなかった。<sup>1</sup>

私の舅になる人はアーラー市<sup>2</sup>で代言人をしており、その弟はバリヤー市で弁護士をしていた。二人がジラーデーイーを訪れた。母のそばにいと父と呼ばれた。二人は私を見て、なにか尋ねていたが、気に入ったということで引き揚げて行った。間もなくテイラク<sup>3</sup>が届けられたが、それにはしきたりで、衣類や台所用具などの他に、お金も添えられていた。私の記憶する限り父はお金のことではやかましいことは言わなかった。現金と品物とで2千ルピーほどのものが届けられていた。私が12歳と数ヶ月の頃だった。

当時は2千ルピーのテイラクと言えは立派なものとしていたが、今では5千ルピーとか7千ルピーといった額のものでさえ、私ほどの身分のものにとっては少ないとされている。テイラクが多ければ多いほど結婚行列は盛大なものでなければならぬし、結納の装身具も多くしなければならぬ。私の結婚式の頃は家の経済状態はよくなかった。一つにはこの3、4年間に次から次へと家族が3人も亡くなり、それぞれの法事にかかり出費がかさんでいた。それに飢饉のために小作料も減取になっていた。ところが、出費は増してきていたのである。私たちをチャプラーやパートナーの学校で勉強させるには毎月なにがしかを送金しなければならなかった。また、長らく係争中の訴訟もあり、それにも出費がかさんでいた。このように随分不如意な中でもやはり結婚式には金を惜しむわけにはゆかなかった。一家の名誉にかかわることだったからである。



父は結納の装身具に関する限り金を惜しまなかつた。その他の準備にも恥ずかしくないようにしたいと思つていた。それというのも一家にとっては父の代になってから初めての結婚式であつたからだ。それに従来通りの金遣いをし、盛大にしなければ、お兄さん（大伯父のことを皆がこう呼んでいた）が亡くなつた途端に格式が下がつたと言われることになる。かようなわけで父としては、私の結婚式は世間に恥ずかしくないものにしたかつた。

私たちの田舎では結婚式の行列のために象や馬をたくさん借りて用いる風習がある。そのほかにも行列に入用の品を借りて用いる。結婚式の日取りは大変めでたい日に決まつた。このような吉日のことを田舎の言葉で「カラー・ラガン」というが、星位がよく、吉祥な時間が大変都合よく得られるのでこの日に挙式をするのが最上とされている。この吉日には式に必要ないろいろな道具を借りるのがなかなか容易ではない。借り手が多いからである。私の行列には象や馬を多数借りる手配をしたのだが、やはり吉日のため間に合わなかつた。僅かに象が1頭と馬が3、4頭間に合わつたに過ぎなかつた。

式はジラーデーイー村から20マイルほどのバリーヤー県のダラン・チャプラーで挙げられることになつていた。2日の道程である。途中のサラユー（ゴグラー）川<sup>4</sup>は船で渡らねばならぬ。行列はジラーデーイー村での儀礼を終えて出発した。象馬が足りなかつたのでかごを多く備わねばならなかつた。荷物は牛車に載せた。私は花婿が乗ることになっている特別のかごに乗つた。兄はわが家に飼つていた大きな馬に乗つたが、皆の出發を見送つてから最後に出かけ、昼飯を出すことになつていたところへは皆より先に着くなど、手伝いに忙しくしていた。父はかごに乗っており、家族や縁家の者もかごやその他の乗物に乗つていた。

花婿の乗るかごはとても不格好なものである。天井部分はないが、布製の日除けがかけてある。ジュート月<sup>5</sup>のことである。猛烈に暑く、熱風もかなり吹いていた。私はそのかごに乗って行かねばならぬのに、その日除けには強い風が吹きつける。それに、かごには銀細工がしてあるのでかなりの重量ときている。かごかきのカハールたちにはそれがかつぐだけでも大変なところへ、強い風で日除けが気球の役目をする。カハールたちには大変つらい仕事だつた。私は私で灼けつくような陽射しと熱風に苦しめられていた。

その日はなんとか無事に過ぎて夜はサラユー川のほとりのある村に泊まつた。いろいろな料理が出された。夜が明けるとサラユー川を渡る準備にとりかかつた。荷物やかご、牛車、牛馬といったものは船に載せることが出来たが象はそのまま水の中を渡らせることになつた。その象も今一つ元氣のない象で川を渡ろうとしない。少し行つては戻つて来る。そこで幾艘かの船でとりかこんで渡らせようと工夫したのだがやはり失敗に終わつた。結局、象に川を渡らせるのはあきらめることに決まり、行列は象なしということになつた。父は行列に一頭も象がいなくなつたのをとても残念がつた。私の式が挙げられることになつてた村から少しばかり離れたところで父も結婚式を挙げたのであつた。そのころは、大伯父がハトゥアーのディーワーンをしており、行列には数十頭

の象が用いられた。父には自分の式の時には数十頭もの象の行列があつたのに息子の時には1頭もないのがひどく気にかかったが、だからといってどうすることも出来ぬ。まさか行列を引き返らせるわけにもゆかぬ。象のことに手間取ったおかげで目的地に着くのは夜になるのではないかと心配になつてきた。

行列は先を急いだ。昼には着く予定だつた処に着いた時にはもう4時近くになつてた。そこで食事を済ませ先へ進んだ。とうとう日が暮れてしまつた。その間に偶然ながら行列が村から1、2マイルのところへさしかかると、象が2、3頭やって来るのにでくわした。それはやはり結婚式の行列に行つたもので、式も終わりどこかへ戻るころであつた。象使いの男たちに話を持ちかけ、いくらお金を含んでやると、男たちはわれわれの行列に加わるのを承諾した。こうして象の件はなんとか願いがかなえられたわけだが、行列が目的地に着いた時には夜の11時近くになつてた。

花嫁側の人たちは気をもんだり、ぶつぶつ言っているところだつたが、行列はようやく着いた。私は夕方になると間違いなく寝入ってしまう癖があつたが、それはたとえ結婚式の日であろうと例外ではなかつた。私は行列が目的地に着くより先にかごの中でぐっすり寝入つてしまつてた。着いた時にはともかく起こされ、バリチャーワンの儀式<sup>6</sup>を済ませた。その他の儀式も次々に済ませた。盛夏に、それも2日間かごにゆられた後のことである。日が暮れるとすぐに寝入つてしまう癖、さらに体はくたくたに疲れているときである。目を覚ましているだけでも私には大仕事だつた。その夜、一切の式が終わり、私のめでたい結婚式も済んだ。私はその式を全部は覚えていない。また、式の時自分がどんな役割を果たしていたかすらろくに覚えていないほどである。子供のころ、姉が人形で結婚式遊びをすると私も一緒に遊んだものだつたが、自分の本当の結婚式もちょうどその遊びと同じようなものだつた。私には結婚の意味もわからず、自分に責任が出来たとも感じなかつた。縁談の取決めにも儀式の進行にも自分から加わつたわけではなく、バンディットや床屋<sup>7</sup>、あるいは、家の女たちや嫁の家の女たちに指図される通りにしたまでのことで、最後に皆が私の結婚式が済んだと考えたに過ぎぬわけだ！一体どういうことになつたのかさえ私にはわからなかつた。もつとも、兄嫁が家に嫁いで来たように私の嫁もいつかは家に来るだろうということだけはわかつた。

結婚式を済ませてすぐには嫁を家に連れてこないことも私たちの田舎の風習である。挙式後、しばらくしてからささやかな二度目の行列が嫁を迎えに行くことになつてた。それを「ドゥラーガマン」<sup>9</sup>という。私の時も嫁を連れては戻らなかつた。行列は2日間そこにとどまり村に帰つた。嫁の家のものは、行列が遅刻したことや予期してつたような盛大なものでなかつたことではなさか失望した様子だつたが、装身具や衣服、それに菓子など、嫁や嫁側の人たちへの婿側からの贈物を見ると、気分が晴れたようで皆が上機嫌になつた。嫁側の女性たちやそのほか参列してつた人たちが喜んだのはきつと花婿の男振りを見てのことだろうと私は思う。もつとも、これについてはなんの証拠も持合せていないのだが！

一年後にドゥラーガマンの式を済ませたので、妻が家に来た。このドゥラーガマンの行列は結婚式の行列よりも小さいのが普通である。この時には象も1、2頭借りることができ、行列に加わった。私の田舎はバルダーの風習がやかましいところで、兄嫁の来た時には女中が2人ついて来ており、兄嫁はその2人としか口はきけなかつたほどだ！一部屋をあてがわれていて、ベランダに出ることさえ許されなかつた。当時は、下男はまだ年少で、母やおばがその生まれたのを知っており、幼い時からその母親と一緒に家に入出入りしているものでないと奥の部屋には入れなかつた。また、下男は成人すれば奥へは入らないことになっていた。料理番が奥に入っていたが、その料理番でさえ奥へ入る前には大声を出して知らせることになっており、母やおばが自分たちの部屋に引き揚げた後に台所に入るのであつた。もし台所にいる時なにか入用なものとあると、だれか女中を呼んで取り寄せる。台所から出て行く時も同じように大声を出して知らせ、女たちが通路にいなくなるのを待つことになっていた。

兄嫁は部屋の外へ出ることさえなかつた。もつとも、用があつて部屋から出るときには皆に退いてもらう。皆といつてもそのような場所にいるのはわが家の女中だけなのだが！そもそも男は奥には顔を見せないことになっている。小さな男の子でさえそのときは立退かねばならなかつた。ところが、バルダーの見地からはそれでも十分ではなく、親許からついてきている女中が兄嫁の姿が見えぬように布切れで隠しながら案内するといった有様だつた。私はとても幼かつたので時にはとんだりはねたりしているうちに兄嫁の部屋に行くことがあり1、2度は兄嫁の顔を見たこともあつた。母やおば、それに姉たちがその部屋に行くことがあれば、兄嫁はサリーの端を頭上から顔に垂らすのであつた。わが家の女中もだれ一人兄嫁の部屋には入つてはならなかつた。

家内が嫁いで来たときもやはり同じように面倒なことをしなければならなかつた。この風習は長い間続いたが、徐々にすたれていった。実家からついてきていた女中は戻つてしまい、わが家の女中の一人が世話をするようになりその女中と少し口をきいてもよいことになつたが、母の存命中は兄嫁も家内も自分の部屋から出て奥で自由に歩きまわることものびのびと振舞うことも出来なかつた。私はといえば、休暇で家に帰ることがあつても戸外で寝ることになつていた。夜、皆が寝静まると母は女中を遣わして私を起こさせ妻の寝ている部屋へ連れて行かせるようにしていた。だが、私は睡くてその時間にはなかなか起きられない。しばしばどうしても目を覚まさぬことがある。すると翌日、母やおばが、夜中に起きないとか呼びにやつても来ないとか小言を言う。それはそうだが、朝早く皆のまだ寝ているうちに起き上つて元の寝台に戻つていなければならぬのだ。だれにも夜中にどこかへ行つていたと気づかれぬように！そばにいる下男にさえ滅多に気づかれぬようにするのだ。

バルダーの風習のために夫婦は二人だけになるにはこうしなければならなかつた。私は子供の頃から家を離れているほうが多かつたので、休暇で家に戻るのが妻に会う唯一の機会なのだが、それも今言つたような具合なのだ。したがつて結婚このかた45年にもなるのだが、一緒に過ごした日を合計しても

2年にも満たぬほどである。学生生活はパートナー、チャプラー、カルカッタで過ごし、弁護士になってからも多くはカルカッタで独り暮らしをしていた。パートナーへ移ってから家族とは1、2度僅かの期間一緒に暮らしただけである。非協力運動が始まってからは家に戻る機会は一段と少なくなったし、家族と一緒に暮らす便宜も得られず、また、仕事に追われてそうする暇さえなかった。

(未完)

(註)

1 大家族であったがために、それまでのブラサードの兄姉の結婚の際も、ブラサードの父は縁談や結納、挙式に関する一切を伯父や従兄に任せていたというわけである。

2 *Ārā* ビハール州西端にあるシャーハーバード県の北東部に位置する。

3 *Tilak* 婚約式及びその際、花嫁側から婿側へ贈られる金品を指す。

4 ヒマラヤに源を発し北部州の北東部を経てビハール州サーラン県(前述)の南端部でガンジス川に合流する。このサーラン県の対岸が北部州のバリヤー県である。

5 *Jeth* インド暦の3月、陽暦の5～6月にかけては雨季前の一年中で最も暑い時期。

6 原文には、ボージュリー語で *Parichāwan* とある。ヒンディー語では *Parchan*。嫁側の女たちが花婿を家を出迎え、花婿の額に(タヒーと米粒の)ティーカーをつけたり、燈明を捧げたり、頭上に杵をかざしたりする儀式。アワド地方では、花婿に対しても、花嫁が婚家へ初めて行く際にも行なわれる。その際、女たちが歌う歌も同名である。 *Rāhul Sānkṛityāyan (sāmp.)*, *Hindī Kā Loksāhitya*, pp. 217, 220

7 大家族制なので、そのまま勉学を続けることが出来るし、生計の心配をする必要もないわけである。

8 *Hajjām* アラビア語で床屋の意。普通には *Nai* と呼ぶ。結婚式にはこのカーストの男女が付人の役目を果たす。

9 ボージュリー語で *Durāgaman*。ヒンディー語では *Dvirāgaman*。本来「再来」、「再訪」の意であり、挙式後すぐに花嫁を婚家へ連れて行くのに対し、実際の結婚生活が始まる際に再度嫁を出迎えに行くことを指す。ここでは挙式後、一度も嫁を婚家に連れて行かずに、ドゥヴィラーガマンの式が行なわれるわけである。

(訳・註) 古賀勝郎